Forgery No.XXXX-

Imitation of the golden witch

～黄金の魔女の模造品～

（中）

「うみねこのなく頃に」原作者の竜騎士07氏。
かつて5ちゃんねるの同人ゲーム板に存在した
「屁理屈推理合戦スレ」で鎬を削っておられた
偉大なる先人の魔女・ニンゲン達。
それ以外の全ての場所で活躍された魔女達。
カケラの海に漂う棋譜を、
後から追い掛けてきた探求者達。
偉大なる元老院の魔女大ベルンカステル卿
並びに大ラムダデルタ卿。
知的にして聡明なる真実の魔女エリカ卿。
この無限の魔法体系の原点である、
大ベアトリーチェ卿、
その最愛の夫であるバトラ卿の、六軒島領主ご夫妻。

……そしてなによりも。
私という魔女を産んでくれた、
とあるコミュニティの魔女・ニンゲン達。

その全てに、この物語を捧げる。

愛がなければ見えない。
けれどその愛を如何にして持てば良いというのか。
それに対して私という魔女が導き出した結論は、
「ならば先に魔女にしてしまえば良い」だった。
屁理屈推理合戦は、無限ならずとも無尽に
地より湧き出すニンゲンを、極めて効率的に
魔女へと押し上げることが可能な儀式である。
この物語によって「あなた」がその一端に触れ、
私と同じ宇宙を共有してくれたならば、
私にとってそれ以上に嬉しいことはない。

目次

Forgery No.XXXX-
Imitation of the golden witch
～黄金の魔女の模造品～（中）

《？？？》――――――――― 7
《ゲーム盤上の設定環境》―――― 9
《風雨の中で》―――――― 15
《一九八六年一〇月五日一三:五三/思考時間》―――――― 22
《一九八六年一〇月五日一六:二〇/三人のベアトリーチェ》―――――― 93

おはようございます。
大変永らくお待たせ致しました。

本日はとある魔女の手になるゲーム盤……その第五の晩発覚より第八の晩発覚までの抜粋をお持ちいたしました。

その魔女はかつて「こんな物を作る手間があるならラブレターを書け」と悪態を吐いたことがありましたが、その言葉故に、その言葉があったからこそ、このゲーム盤は構築されました。
つまり、これはその魔女からあなた方へと捧げるラブレター。

全てをそこに記しました。
全てをそこに残しました。
ベアトリーチェ卿が、バトラ卿へと向けたように。
全ては、あなた様への信頼と親愛を込めて。

だからこれは模造物。
黄金の魔女のゲーム盤へと敬意を捧げ、
親愛なる読者のあなた様へと捧げる模造品なのです。

難易度は標準。
数多の物語を巡ってきた皆様を騙すなど、とてもとても。
けれど皆様次第では極上とも、簡単とも転ぶでしょう。
ミステリーとは、そういうものでございます……。

この物語はどうせ幻想に決まっています。
実在する如何なる個人、団体、地名、事件、作品とも
関係あるはずもありません。

この物語は未だ完成していません。
物語が完成した際に、今宵公開された部分がそのまま
残っている保証もありません。

それでもよろしいという方。
或いは、私のゲーム盤を覗き見たいという方。
そんな愛おしき読者にして探偵の皆様のみ、この先を
お読み下さい。

《？？？》

――人間には、様々な顔がある。

世界の、どの地域においても語られる、ありふれた言説だ。

無論その言説における顔とは、態度や、感情、雰囲気、その他様々な要素で構成されるものであり、ただ単に顔といってもその人の風貌そのものを指す訳ではない。

そして、世界に完全に同一な人間が存在しないように、その顔も様々な意味と、その対となる顔を持つ。

それは例えば、日頃から紳士的な態度で振る舞う青年が、その内には卑屈で自己肯定感に乏しい一面を秘めているように。

それは例えば、男勝りの快活な少女が、純な乙女そのものの初々しい感情を内に隠し抱いているように。

……それは例えば、妻へと熱心に愛を語る男が、裏ではビジネスパートナーと密通を交わしていたように。

……そして、それは例えば、人情に厚く誰かの痛みを理解できる青年が、何かの機会さえあれば冷徹に、それら全てを排除して思考することも可能なように。

人間には、ニンゲンには、様々な顔がある。

それは、社会の中で生きるには、欠かせないものだ。

一人で生きていけるニンゲンなど存在しない。

生命的には一人で生きていけるのだとしても、一人で生きている時点で、それはもうニンゲンではないのだ。

だから、ニンゲンは、多くの顔を持つ。

より多くのニンゲンと関わり、自分がニンゲンであるために、あり続けるためにそれは必要なこと。

この一つの真理を魔法理論で表現したのが、[宇宙を生み出す最少人数は二人]なのだ。

……けれど、家具はそうではない。

家具は、ただ一つの目的のために生み出された存在。

本質的には、ただ一つの目的のためだけに生み出され、そしてそれに殉じてその役目を終える。

魔女の家具は多くの場合複合的な役割を果たすことが可能なため、一見してそれに反するように見えるが、それは結局のところその一つの役割を果たすために副次的に得た技能でしかない。

だから、多くの場合、家具はその目的を果たすことが不可能となった時点で機能を停止する。

それは、ニンゲンの視点では死んだと見なすことも可能かもしれない。

或いは、職務を果たし、職を辞したとも表現できるかもしれない。

しかし仮に、その目的を果たすことが不可能となった家具が、それでもなお稼働しているというのであれば。

それはきっと、家具ですらないのだろう。

それはきっと、只の模造物。

人に似せた、人形でしかないのだ。

《ゲーム盤上の設定環境》

・一九八六年一〇月四日から一〇月五日にかけての二日間に渡り、伊豆諸島の離島、六軒島において右代宮一族が集う親族会議が開催される

・一九八六年一〇月四日一二:〇〇時点において、六軒島に存在するのは、

●右代宮家当主
右代宮　金蔵（うしろみや きんぞう）

●金蔵の長男にして次期当主
右代宮　蔵臼（くらうす）

●金蔵の長女
右代宮　絵羽（えば）

●金蔵の次男
右代宮　留弗夫（るどるふ）

●金蔵の次女
右代宮　楼座（ろうざ）

●蔵臼と夏妃の娘
右代宮　朱志香（じえしか）

●絵羽と秀吉の息子
右代宮　譲治（じょうじ）

●留弗夫と先妻、明日夢の息子
右代宮　戦人（ばとら）

●楼座の娘
右代宮　真里亞（まりあ）

●蔵臼の妻

右代宮　夏妃（なつひ）

●絵羽の夫
右代宮　秀吉（ひでよし）

●留弗夫の妻
右代宮　霧江（きりえ）

●金蔵の主治医にして親友
南條（なんじょう）　輝正（てるまさ）

●使用人頭
呂ノ上（ろのうえ）　源次（げんじ）

●片翼の紋章を持つ使用人
紗音（しゃのん）

●片翼の紋章を持つ使用人
嘉音（かのん）

●専属料理人
郷田（ごうだ）　俊朗（としろう）

●年配の使用人
熊沢　チヨ

以上、一八名。

◇　◇　◇　◇　◇

〝character.1〟が更新されました。

◇　◇　◇　◇　◇

・六軒島は絶海の孤島である。
最寄りの新島（伊豆諸島を形成する内の一

島)より、船で三〇分を要する。

・一九八六年一〇月四日は午後より台風の接近により天候が悪化。
　船による上陸、及び出港が不可能となり、島からの出入りが阻まれる。

・よって、現在島内に存在するのは右代宮の関係者のみ。
　……と、親族会議の出席者達は認識している。

・島内には当主である金蔵の隠し黄金の噂と、「黄金の魔女 ベアトリーチェ」なる存在の噂が広まっている。

・右代宮の屋敷には謎めいた「碑文」が掲げられている。
　この碑文を解いた者は金蔵の隠し黄金を手に入れられると噂されている。

・金蔵の余命は残り僅かであると宣告されている。
　そのため莫大な遺産の相続が親族達の争点となっている。

・四日夜
　夕食のメニューはステーキ。
　夕食後に真里亞がベアトリーチェより渡されたと称する手紙を朗読。
　親族達の間に衝撃が奔る。

◇　◇　◇　◇　◇

〝tips.1〟が更新されました。

◇　◇　◇　◇　◇

・同日夜半、戦人が留弗夫に呼び出される。
親子の親睦を深める、という名目で留弗夫、

霧江、戦人でしばらく会話。

・戦人がいとこ部屋に帰ってきた段階で既に朱志香譲治真里亞は就寝している。その際、部屋を退出する楼座と入れ違いになる。

・一九八六年一〇月五日

・五日朝

・戦人が午前七：〇〇に起床するも、いとこ部屋には戦人以外の姿がない。

・戦人は本館へと移動。そのまま午前八時までを過ごす。

・戦人と紗音、ゲストハウスへ移動。その際に、いとこ部屋での異常を察知。

・第一の晩の事件発生。

犠牲者は絵羽、朱志香、譲治、真里亞、夏妃、秀吉。

真里亞以外の五人は顔面を半壊させられており、真里亞は絞殺されたと思しき痕跡が残存していた。

・戦人と紗音が現場に到着した時点では、いとこ部屋は鍵とチェーンによる施錠が行われていた。

・この時点で源次より「無線が通じなくなっている」との報告あり。

・Character2、tips2が更新されました。

・第一の晩の事件発覚後、生存者は客間へ移動。

・紗音、熊沢、郷田は使用人室へ。源次は客間で待機。

・金蔵に指示を仰ぐべく3階の金蔵の書斎へ大人達は赴くが、金蔵は行方知れずになる。
以後、金蔵は行方不明に。

・tips3、Character3が更新されました。

・客間内部で口論が発生し、次男一家のみ、2階客室に移動。

・戦人、捜査の為、部屋を出る。

・廊下にて嘉音、源次と合流。

・2階客室にて銃声を察知し、部屋へ戻るものの、部屋は鍵とチェーンで施錠されていたため、チェーンを破壊して室内に突入。

・第二の晩の犠牲者として留弗夫、霧江が死亡。

・tips4、Character4が更新されました。

・楼座が戦人を犯人だと疑い、銃口を向けるが、諍いによって嘉音が暴発で死亡する。

・動揺によって逃げ出す楼座と、それを追った蔵臼。
嘉音の最期を看取ろうとした戦人と南條源次でグループが分断される。

・源次と合流すべく、厨房に向かうものの、源次、熊沢、紗音の四人が行方不明に。

・厨房内には荒らされた形跡なし。

・厨房内で発見された洋形封筒の内容に従い、地下ボイラー室へ移動。

・地下ボイラー室において第五の晩の犠牲者となった紗音を発見。

・tips5、Character5が更新されました。

以上の前提を踏まえた上で、ゲーム盤を再開する。

《風雨の中で》

――ずうっと降り続けている雨の中を進む。

……風は止んでいる。それによって、雨の音は殴りつけるようなものではなくなっていた。ごうごう、ではなく、ざあざあ、と。そんな音が周囲に満ちている。

地下からの階段を登り切ってみれば玄関ホールの向こう側のガラスに打ち付ける雨粒は静かで、先程までのように窓枠をガタガタと揺らすようなことはしない。

雨量だけは変わらずに滴り続けていたが、その降り様は、止む気配がない……という意味では川の流れのようでもあるし、静かに溢れ続けるという意味では――。

「……(泣かれてるみてえだ)……」

胸中で呟いて、その自分の台詞に嫌気がさす。

何故そう感じたのか。

何故、そう考えるに至ったのか。

咄嗟にそれを自問してしまい、俺は首を振る。

そんな事を考えるのは……“自分自身に、何か泣かれるようなことをした自覚があるから”じゃないのか。

……自分自身に、何かやましい覚えがあるからじゃないのか。

……どうだろう。分からない。

泣かれるようなことをした自覚は……ある。

やましいことをした覚えは……これもある。

……だが、それでも……。

「……」

……視界の先の窓ガラスには、今殺人現場から返ってきたばかり、といった雰囲気を……それが、どういった意味であれ……漂わせる、全身に血がこびり付かせた俺の姿が映っている。

疲れ切った顔で、澱んだ目をした男の姿。

……約束を守れなかった男の姿だ。

「……戦人さん？　どうかされましたかな？」

背後に居た南條先生の怪訝そうな声がする。

やけに、声が近い。

先程はもう少し後方に居たと思うのだが、何か有ったのだろうか……と振り返って、俺は自分自身が立ち止まっていたことに気付く。

「っと……、悪い、立ち止まっちまってたか」

俺を見つめる南條先生の表情は窓に映る俺と同じで疲弊して、憔悴している。

昨晩南條先生を初めて見た時の、穏やかで優しそうな人だ、という印象は良い意味でとうに失せていた。ここにいるのは、たった二日の間に幾人もの命をその手から取り落としてしまった悔恨を胸に抱く、一人のお医者様だ。

そんなお医者様が、俺に対して言外に「大丈夫ですか？」というニュアンスで問いかけているのだから、よほど危うい状態に見えたのかもしれない。

……いや、かもしれない、ではない。

俺だって前を歩いている奴が突然何事かを呟き始めて立ち止まれば心配の一つや二つするだろう。

特に南條先生は朝から或いは親父達が殺害されて以来、俺の目の前で何人もの人が死んでいることを知っている訳だから……そういった意味でも俺が限界なのではないか、と思わざるを得なかったはずだ。その心配は、よく理解できる。

……それに、その懸念は確かに事実ではある。

今が午後2時。朝に事件が発覚したのが八時頃だったことを考えると、まだ六時間しか経っていない。

なのに明日迎えにくる船の無線機から通報して、そして警察が来るのを明日の昼前と見積もっても、まだ20時間近く時間がある。ここから更に朝からの時間の三倍以上を耐えなければならないのだ。そしてそれにも関わらず、何処でも構わないから座り込んで休みたい、と俺自身が思ってしまっている。

「……このままではいけませんな戦人さん。私らは一度休息を取る必要がありそうです」

「ああ……俺もそう思うぜ……一旦客間にでも入って一息を――」

――結局、源次さん、郷田さん、熊沢さんの三人は見つからなかった。
ボイラー室には紗音ちゃんしか存在しておらず、三人の姿を発見することはできなかったのだ。
既に殺され、死体はどこかに隠されてしまったのか。或いは残りのメンバーこそが犯人で隠れているのか。
そのどちらも可能性としては残っている以上、三人を探して俺達二人だけで彷徨い続ける訳にはいかない。
そもそも本来ならば俺達は紗音ちゃんを呼ぶために客室から出てきた筈だったのだ。しかし、それがあれよあれよという間に散り散りになり、今ではすっかり分断されきってしまっている訳だ。

……この現状……チェス盤をひっくり返して考えるのなら……。

――いや待て、違う。
思考のベクトルを変えろ。

慣れ親しんだチェス盤思考を行おうとして、脳裏にパチリと走ったひらめきがそれを否定する。

チェス盤思考術は確かに、敵対者の思考を推察できる有用な戦法だ。だが、霧江さんはかつて自分で言っていたことがある。この思考術には致命的な弱点が存在する、と。
チェス盤思考術はゲーム理論から発展したものだが、そもそもこれは「双方が必ず最善手を尽くす事」を前提としている。
ならば、ゲームの勝利条件が明らかでなければその最善手すら取ることができない。

……つまり、俺が犯人の思惑をチェス盤思考術に則って考えようとした場合、何よりも先に一つ、明確にしなければならないものがある。

それは、このゲームの勝利条件に当たるもの。すなわち犯人の目的だ。

犯人が何を目的としてこの事件を起こしているのか、何を生存者達にさせようとしているのか。

それを、仮定でも良いから明確にすべきだろう。

ただチェス盤をひっくり返すだけでは今のこの状況は説明できない。

現状、どこからどこまでが犯人の目的通りで、計画通りなのか。それが分からない。

俺達は今、俺と南條先生、楼座叔母さんと蔵臼伯父さん、行方不明者の使用人達、という三つのグループに離散してしまっている訳だが、何故そうなっているのかは先程の親父達の客室での一件のせいだ。

俺、嘉音君、源次さんが客室のチェーンロックを破壊して室内に飛び込んだ際、親父は既に致命傷を負っていた。

だが、楼座叔母さんは俺が犯人なのだ、と主張し……そしてその後発生した口論の最中、銃が暴発。嘉音君が俺を庇い、楼座叔母さんに胸部を撃ち抜かれた、……のだと思う。

動揺した楼座叔母さんと、それを追った蔵臼伯父さんは部屋から出て行き、俺達は嘉音君をその場に置いたまま源次さんを探して厨房へ……。

……楼座叔母さんが嘉音君を撃ったのは故意には見えなかった。
しかし、仮にだが、もしも楼座叔母さんが共犯で、事故に見せかけて嘉音君を撃つように指示されていた……或いは真里亞の話がらみで冷静さを失ったように見せかけて嘉音君を排除する計画だったのなら……。俺に容疑を吹っかけることで、俺が逆に楼座叔母さん側へ嫌疑を向けることを最初から想定していたのなら……。
この場合は、楼座叔母さんは完全にクロ、ということになる。
……だが一方で、もしも楼座叔母さんが嘉音君を撃ったのが本当に事故であるのならこの仮定は成立しない。
偶然楼座叔母さんが俺に嫌疑を向けて？　偶然俺が言い返して？　偶然嘉音君が俺の前に立ちふさがって？　偶然銃が暴発した？
……あり得ないだろうそんなこと。この工程の何処かに、必ず作為的な物が混じっていると考えるべきだ。……だが、もしもそうであるのなら、今のこの状況は犯人にとっては想定外の状況の筈だ。この状況へ至るための前提条件が複雑過ぎるという一点で、これが完全に犯人の手を離れた混乱状態であると考えた方がしっかり来る。
……多少暴力的な結論だが、纏めてしまえば二択だ。
現状の全てが犯人の想定した打ち筋なのか。
それとも、これは賽子の出目が犯人の想定を上回った混迷の結果なのか。

……。

……ピースが、足りていない。
棋譜を見れば相手の手癖も見えるだろうが、無論そんな物はない。
俺は、ここに来て、チェス盤思考の限界に直面している。

……この思考術は、敢えて乱暴な言い方をするのであれば……相手のことを熟知しなければ、相手の立場になれないのだ。
従って、……相手の勝利条件も見えない。
相手が何を目的に手を指しているのかが見えない。
ベアトリーチェを名乗るこの犯人は、何をさせたいんだ……。

……一つだけ。
そんな混迷を極める思考の中で、あやふやな解が……いや、解とすら呼べない思いつきのような考えが、浮かんでいる。
……まるで、この事件は……俺に……。

――その瞬間、……遠くから聞こえてきた何かが、俺の思考を停止させる。

タッタタッタタッタタッ――。

「「っ……？！」」

最初、……本当に最初の一瞬だけは、きっと俺も南條先生もそれを雨垂れの音だと思っただろう。
……いや、それは厳密ではない。

俺達はきっと、信じたくなかっただけなのだ。
それが、こちらに駆け寄ってくる何者かの足音がする……！！
今、明らかに……！　誰かが駆け寄ってくる

「――、」

喉が引き攣れる。喘ぎ声のようなか細い悲鳴が漏れ、身体は硬直して動いてくれない。
……にも関わらず、その足音は我関せずと言わんばかりに近寄ってくる。

……一つでは、ない。

まるで乱雑な行進のような、バラバラな歩幅の、複数の足音だ。
その情報を瞬間的に分析できてしまったからこそ、余計に身体が硬直する。

足音が一つではない、ということは一人ではない、ということだ。
そして今この六軒島で、最も複数人で行動している可能性が高い人物とは、幾人もの殺人を繰り返し……つい先程も紗音ちゃんを殺した、……犯人……！

「南條先せ――――」

「――動かないでッ！！」

どうにか動いた身体が南條先生を物影へと引き戻そうとするが、それをするにはもう遅過ぎた。硬直から復帰した俺の反応速度よりもこちらに駆け寄ってくる足音の速度が圧倒的に早く、冷たい声と共にその人影が廊下の向こうから躍り出る。

その手には鈍く輝く凶器――ライフル銃が握られていて……。

「楼座叔母さ――」

「……動かないで、と言ったわよね？」

ガチリ、――と……。

黒い虚ろが、銃口が、俺を覗く……。

……なんで、とは最早言えなかった。

俺は今、自分がどのような姿をしているかを知っている。

べっとりと、……真っ赤な色彩をこびり付かせた、

その衣服に、……鮮血をこびり付かせた姿がどのようにして他人から見咎められるのかを……。

「……戦人君、南條先生。聞きたいことがあります。客間へ来て頂戴」

……その声は、……逃亡中の脱獄囚を発見した警官のようだった……。

《一九八六年一〇月五日一三:五三/思考時間》

「……それで、紗音ちゃんの死体はボイラー室に置きっぱなしなのね？」

「……ああ、流石に俺と南條先生の二人きりでここまで引き摺ってくる訳にはいかなかったから……」

――本館一階、客間。

今この場には、俺、南條先生、楼座叔母さん、蔵臼伯父さんの四人が居る。

先程玄関ホールで楼座叔母さん達と合流し、そのまま……銃を突き付けられ、連行されるように……俺達は客間で一息を吐いていた。

部屋の中央部分の楼座叔母さんは俺達の動きを警戒しているのかライフルを握り締めたまま少し離れたソファーに座り、蔵臼伯父さんはまるで警邏のようにドアの脇で立ったまま客間の外を警戒している。

……どちらも、俺達の一挙一動に意識を向けているのが客間内のひりついた空気から伝わってくる。

俺達を怪しんでいる、俺達の言動を警戒しているのは確実だが……しかし、俺は逆に、その反応を見て一つの確信を抱くに至った。

楼座叔母さんと蔵臼伯父さんは、……少なくとも片方は、という但し書きが必要になるが、恐らくシロだ。

「犯人の姿は見られなかった、ということだが……南條先生もかね？」
「そうですな……私達がボイラー室に入った時には既に奥の扉は開いていましたし、私達は紗音さん以外の人物は見ておりません」
「……そう……」
「……ふむ……」
楼座叔母さんと蔵臼伯父さんは二人とも銃を保有している。
対して、俺と南條先生は先程握り締めていた麺棒とモップすらその辺に放り出してしまっている。
銃火器と、無手。
２対２のもみ合いになった際、どちらが優位となるかは考えなくてもわかる。
であるにも関わらず、二人は俺と南條先生の動きに注視し続けている。一時も意識を逸らしたくない、襲われたくない、とでも言うかのように。
それは一見して不審な挙動だ。俺達を怪しいと決めつけてかかるような行動に思える。
……だが、ならばこう考え直してみればどうだろう？
チェス盤を、ひっくり返す……。
[絶対的優位にあるにも関わらず、何故か俺達を警戒している]のではない。
[絶対的優位であることを信じられないから、俺達を警戒している]のだ……。
そしてこの場合の絶対的優位とは、襲われることがない、という立場であることを指す。

つまり、二人は、銃を持っているにも関わらず、俺と南條先生に襲われることを恐れているのだ。
即ち、それは……。
「(俺達を犯人側である、と……心から疑っていなければ出ない発想だ……)」
故に、俺はこの二人を、……少なくともその片方は確実にシロである、と断言する。
シロであるが故に嘉音君を銃の暴発で殺害してしまったことにあそこまでショックを受け、シロであるが故に俺達を今こうして恐れているのだ。
……俺は、疲れた頭で、楼座叔母さんと蔵臼伯父さんを、そっと眺める……。
……二人とも、憔悴し切った顔をしている……。

愛する娘と、愛する家族を奪った犯人に対する憎悪、怒り。それを燃やすことで、今にも崩れ落ちそうな身体を突き動かしているのが見て取れる……。
……ああ……。真里亞も、朱志香も、夏妃伯母さんも……例え殺されても、こんなに悔やんでくれる家族が居るんじゃねえか……。
だってのに、俺はなんだ？　本当に、親父と霧江さんの死を……そして俺の手を握る力が少しずつ弱まっていったあの二人を、……俺は……。
……、……。
……？
待て、……何だ？　俺は今、何に引っかかった……？

この島に来てから……今この瞬間までに重ねた一日と少しの時間が、脳内で何か一つの像を結びかけて、……形を成さぬままに霧散する。

「(くそっ……何だ？　俺は今、何に気づきかけた……？　……駄目だ、思い出せねえ……！　何だ、何を考えた結果、それに届きそうになった……？！)」

指を額に当て、追想に耽るが……俺が先程何に気付きかけたのか、までは行き着かない。トントン、と叩いてみても、天を仰いでみても、一瞬の光明は思考の海に沈んだままだ。

「……はぁ……」

数分頭を悩ませてみたが、見当も付かない。

テレビのチャンネルを変えようとしたのに途中で新聞を手にとってしまったせいで何をしようとしていたのか忘れてしまった、というものに似たありがちな現象だが……。

……何故か、疲れた俺の頭はそれを、逆の意味で捉えてしまう。

偶然で真実に至るのではなく、真の意味で、この事件の答えに辿り着かなくてはならないのだと。

「……」

思いつきでは真相に至れない、というのは……。

……探偵が偶然の閃きで答えに行き着いてはならない、というのはノックスの十戒の中の一要素だったか。
確か……ノックスの、第六条だった筈だ。
【ノックス第六条、探偵方法に偶然と第六感の使用を禁ず】

……考えよう。
思考を積み重ねて、……一歩ずつでも良いから、この事件の真相に至ってみせるのだ……。

……方向修正しよう。

まず現状の確認だ。

今、俺が所在を把握できている人物は俺を含めて四人。
俺、南條先生、蔵臼伯父さん、楼座叔母さん。
これまでに犠牲になったのは夏妃伯母さん、絵羽伯母さん、秀吉伯父さん、親父、霧江さん、朱志香、譲治の兄貴、真里亞、嘉音くん、紗音ちゃん。
行方不明の祖父様、源次さん、郷田さん、熊沢の婆ちゃん。

行方不明の四人の所在を探すのは最優先事項として……。
……一度、全員の死体をチェックすべきだろう。
俺の眼前で銃の暴発を受けた嘉音くんは置いておくとして、いとこ部屋で殺害されていた六人と親父、霧江さん、紗音ちゃんの死因

について俺は自分の目で確かな検証をしていない。
そのいずれも厳密に確認するよりも先に何らかの要因でその場を離れてしまっているため、細かなチェックが出来なかったのだ。
特に紗音ちゃんに関しては怪しげな杭こそ突き刺されてはいたが……正確には致命傷が何なのかは不明だ。

先程紗音ちゃんに刺さっていた杭を見た時にも考えていたが、アイスピックのように突き刺すには形状が不向きなのだ。手槍のようにある程度の柄の長さがあればその部分をしっかり握り締めて人を殺害することも可能かもしれない。
だが、杭は胸元に突き刺さっているように見えた。

あんな見え見えの凶器を真っ正面から振りかぶって、胸に突き刺して……それを、紗音ちゃんが無抵抗で許した……？
そんなことがあり得るのか……？

いや、そもそも……それを言い出すと、何故紗音ちゃんは「ベアトリーチェ様が魔法で杭を操った」などというよく分からない発言をした……？
杭を直接ブッ刺した、というのではなく、例えば……そう、杭をボウガンの矢のように射出する何らかの武器を犯人が持っていて……紗音ちゃんはそれを魔法によって操った、と表現した……？

……紗音ちゃんの発言を無視して、一度冷静に考えてみよう。
あの杭では人体に突き刺すには不向き、且つ真正面からでなければ胸元には突き刺せな

い。抵抗も、何もなくそれを実現するにはどうすれば良い？
それが魔法だから可能だった……という方向ではなく、事実として突き刺さっている以上は……。

……チェス盤を、ひっくり返す……。

逆に考えろ。どうすれば真正面から杭を突き刺せたのか、ではなく……どうすれば、杭が突き刺さった状態で発見させられるか、だ……。

……親父と霧江さんのことを思い返せ。
真正面から杭を突き刺すことが不可能でも、真正面から杭が突き刺されたように見せかけることは可能な筈だ。

つまり、……銃創に杭を突き刺して、杭で殺害したように見せかければ良い……！

こうすれば凶器としては不向きであろうあの杭で直接殺害したように見せかけることができる。
であるならば、魔法によって杭を操った、という怪しげな証言を信用する必要もない。
実際に杭を射出するボウガンが存在するかどうかは度外視するとしても、犯人がそんな怪しげな武器を所有していると考えるよりは銃を持っていると考えた方が筋は通る……。

……いや、だが……そうなるとやはり、棚上げしていた問題に向き合わなければならない。

紗音ちゃんの証言は、……何だ……？

……そう言え、そう証言しろ、と脅迫されていた？
いやそれもおかしい。

脅迫、というのは得てして命や大事な物、者を盾にして意のままに動かすことだろう。この場合は、紗音ちゃんが何らかの犯行を目撃してしまい、それを犯人に「口外すれば殺す」と脅されていた……というのであれば理解はできる。

しかし、あの状況において紗音ちゃんは瀕死だった。

瀕死で、且つ俺に対して真実を見つけ出して欲しい、とまで言った彼女が、何故最後にそんな発言をした……？

……魔女、というのは……何らかの比喩で、あの時俺が思った通りダイイングメッセージのようなものだった？

俺と南條先生が気付けなかっただけで、あの場では犯人の正体を直接口に出せない事情が……例えば犯人はドアの裏などに隠れ潜んでいて、犯人が誰か、を彼女が伝えた瞬間銃弾が俺達を襲っていた……と仮定すれば、一応は筋は通る。

通る、が……。

……やはり、不自然だ。

……。

……。

……。

状況への違和感が、思考を加速させる。

示された矛盾を解決すべく、脳が仮定を生み出し続ける。

……そして、当然のように、俺は非常に不快な仮説を思い付いてしまう。

彼女がその間際に俺に縋った、その約束に泥を塗るような、最悪の考えに、……至ってしまう。

……俺は、確かに、南條先生にこう言われた。「意識を失えば、もう」と。

そして紗音ちゃんは最後には俺の腕の中で頭を垂れた。

……だが……。

……あの時の俺は、犯人を追うことを優先して厳密には検証しなかったが……。

ならば、それを元に構築される疑問はただ一つ。

『あのとき、紗音ちゃんは本当に――――――――――――――――――――――――。

……止まれ。

それは、無しだ。

それは……それは、……最後に、したい。

……俺は、……俺は……。

確かに、犯人を見つけたい。

この事件の真相を、解き明かしたい。

嘉音くんと、紗音ちゃんと、そう約束したからだ。

だが、それは、……それは紗音ちゃんを犯人に仕立て上げてまで達成されるものでは……。

……。

……。

……。

「譲治様を殺した犯人を、……例え、戦人様が、今この島に存在するニンゲンの誰をも疑いたくないのだとしても、それでも」

「戦人様の手で、この事件を解き明かし、真相を暴いてください」

「ぼくから、も……おねがい、します……

……この、じけん……はんにん……」

「おねがいします……真相……朱志香、お嬢様……、ころした犯人……みつけ、……だして……」

「やくそく……。ベアトリーチェさまの、しょうたい……、じょうじ様、を……殺した、はんにん……見つけ……て……」

「おねがい、します……しんじつ、を……」

……。

脳裏に過ぎる、紗音ちゃんと嘉音君から託された願い。

それが、俺の逡巡に冷や水を浴びせ掛ける。

そんなものか、右代宮戦人。

お前は、彼女達のその言葉にどう返したか、もう忘れたのか？

お前は、やはり約束を破るのか？

――頭の何処かで、冷たい声がする。

氷よりもなお密やかに、冷徹な俺が、俺に覚悟を問う。

「例え、誰を疑うことになったとしても、この事件の真相を」

……。俺は、迷っている。

その、最後の確証を、胸の中に抱けないでいる。

最後の一歩を、踏み出す勇気が持てずにいる。

人間としての倫理を投げ捨てて、全てを推理に繋がるかどうかで判断する。

それは確かに探偵に相応しい姿勢なのだろうが……。

誰かを疑いたくない、親しい人を犯人だと思いたくない。

それは人として普通の心理だろうし、俺自身それを恥だとは思わない。

だが、もしもそれを投げ捨てなければ、謎という山脈を踏破する行為を、推理を、十全に行えないのであれば。

人を人たらしめるその一線を越えなければ、……真相という頂に至れないのであれば……。

俺は……。

「――――蔵臼さん、楼座さん、少し……よろしいですかな？」

っ……。

突然、南條先生の声が客間に響き、俺は顔を上げる。

「……どうかしましたか南條先生」

「……お聞きしたいのですが、……先程、私達がボイラー室に赴く前には……、一体、何処で何をしていたのです？」

――ピリ、と……。空気に、緊張が奔る……。

「それは、……どういう意図での質問ですか南條先生？」

「他意はありません。ですが、……我々にだけ分かれた後の動向を聞き糾すのは、少し思うところがありましてな」

「あんたねえ……！」

その言葉で発火しかけた楼座叔母さんがガタリ、と腰を上げてライフルに手を伸ばす。

「ばっ……！？　よせ、楼座叔母さん！　南條先生も！」

無論、俺だって“どちらかといえばこちら側”――つまりは俺と同じく疑われる側――だと思っていた南條先生がそんな爆弾を投げ込めば焦りもする。

言い方こそオブラートに包まれてはいるが、それは「じゃあこっちばかり疑ってるあんたらはどうなんだ」という挑発とも受け取られかねないものであり、何よりも俺が先ほ

ど親父と霧江さんの客室で楼座叔母さんに吐き捨てた暴言とそっくりそのまま同質のニュアンスを秘めていた。
この客間でさっきと同じことを繰り返すつもりか、と立ち上がりかける俺と、南條先生を敵意剥き出しの眼で睨み付ける楼座叔母さん。そして視線すら合わせないまま静かに自分の手を見つめる南條先生。
一触即発の空気と気配が居間を満たしてゆく。
「……楼座さん、私は紗音さんが戦人さんの腕の中で息を引き取るのを見ました。日頃から私たちをもてなしてくれていたあの紗音さんが……幼い頃より朱志香さんと姉妹の様に過ごしておられたあの紗音さんが、です」
南條先生の視線は動かない。ずっと、ずっと、自分の手のひらを見つめ続けていた。
一度、二度。それを握りしめて、また開く。まるで、まだそこに何かが残っているかのように。……そして、自分の手に付着した血液から目を離せないとでも言うかのように。
……そも、南條先生は俺とは今年が初対面なだけで、ずっと祖父様との交流を持っていた人だ。当然、この島にも幾度となく訪れていた筈だ。だから、南條先生は、この島の住人達のことを、昔からずっと見てきた人でもある。……南條先生は、あの時何を想ったのだろう。紗音ちゃんが俺の腕の中でその力を失った時、小さな頃からずっと見ていた使用人の少女が事切れるという時に、一体何を想ったのだろう。
「……私も、真実を知りたいのです。教えていただけませんかな、楼座さんと蔵臼さんはどこで何をされていたのかを」

自分にも何か出来ることがあった筈だ、自分にも何かしてやれることがあった筈だ。……そんな罪の意識すら感じさせる言葉。今日、この島で幾人もの犠牲者をただ見ることしか出来なかったお医者様だからこそ、銃を向けられた中であっても紡ぐことを許される言葉。その切実な願いに、居間の内部で張り詰めていた糸が弛緩してゆく。

カチリ、カチリ、カチリ。
ゆっくりと溶け出していく静寂の中で、秒針の音だけが響いている。

……そして。

「……良いでしょう」

ふうぅぅ、と。大きな息を吐き、その静寂から一足早く脱した蔵臼伯父さんが、どさりと音を立てて南條先生の前のソファに座り込む。

「蔵臼兄さん！？」

「お前も座れ、楼座。……今の我々に必要なのは落ち着くことだ。朝方から我々は屋敷中を駆け回ってきたが、そろそろ腰を据えても良い頃ではないかね？」

「そんなことどうだって良いわよ！　今の私達にとってこの二人は推定クロ！　オオカミに気を許すのは馬鹿のやることでしょうッ！？」

「だが、我々もこの二人からすればかなり黒い位置に居る。……特に、暴発とはいえど、嘉音を撃ってしまったお前は」

「ッ……！」

「……楼座。真里亞ちゃんを失ったお前の苦しみは分かる。だがな、楼座」

そこで蔵臼伯父さんは一息区切り、楼座叔母さんではなく自分に言い聞かせるように言葉の残りをぼそりと呟く。

「……私も、夏妃と朱志香を殺したやつはこの手で撃ち殺してやりたいと思っている……」

それは暗い、本当にどこまでも暗い言葉だった。

妻と娘を一晩で二人とも喪った父の、憎悪と悔恨に満ちた重い言葉だった。

その重さに、苛立っていた楼座叔母さんもハッとして息を呑む。

「……蔵臼兄さん……」

「首をこの手で締め付けて……、止まる息の根を直接感じたいとすら思う……！　だが、それとこれとは別だ……！　ここでいがみ合って、銃口を突きつけ合って、……それが何を生む！？」

「お前も走り回ったなら分かっているだろう楼座、屋敷の中には私達以外誰も居ないのだ！　犯人はこの屋敷の外、いいや或いはベアトリーチェの隠し屋敷とやらに潜んでいるのかもしれん、だが我々にそれを確かめる術はないッ！！」

……ベアトリーチェの隠し屋敷……？　なんだそりゃ、初めて聞いたぜ……。
今すぐその情報について聞き糾したいところだが、そんな俺をよそに蔵臼伯父さんは楼座叔母さんを宥めるように言葉を紡ぎ続ける。

「我々にできる事は無い！　我々に出来るのは閉ざされた部屋の中で息を潜め、明日の迎えの船を待つことだけだ！」

蔵臼伯父さんはふぅ、と息を吐く。

「……犯人は、これをこそ狙っていたのかもしれん。我々に猜疑の種を振りまき、籠城した我々が内部より分裂し、それをこの島の何処かより眺めて嘲笑っているのかもしれん」

不和。それは他のいかなる要因よりも圧倒的かつ効率的に惨劇を引き起こせる死神の罠だ。事実その罠によって俺たちは犠牲者を発生させ、分断され、今もこうしてお互いを疑い合っている。それすらも犯人の計画の内ならば、それは犯人自身が手を下すよりもよっぽど上手いやり方の筈だ。
……しかし、本当にこの事件の犯人は、その罠すらも計画へと組み込んでいるのか……？

「うむ……そうですな……。我々が内部分裂を起こして散り散りになることこそ犯人の狙い、という可能性も十分にあるでしょう」

先ほどのように、と言わんばかりに呟かれた南條先生の言葉。それに続いて蔵臼伯父さんはなおも話す。

「犯人が単独犯か複数犯なのかすら分からんのだ……仮に楼座、お前が戦人君を共犯だと疑っているとしても、それがそのままイコールで彼をクロだと断言する理由にはならん。クロでは無いならば、排除する訳にはいかん。既に我々はクロではないが疑わしいから、という理由で留弗夫達を追い出して死なせてしまっている……」

「っ……」

びくり、と体を震わせる楼座叔母さん。恐る恐るこちらを伺う視線には怯えと、罪悪感と、後悔と、疑念が混じっている。

「……蔵臼伯父さん、いいっすか」

「ん、ああ……」

その顔を見て、会話の推移を静観していた俺は口を開く。

「……別に俺は良いんだ、疑われるのは分かる。俺が逆の立場だったら間違いなく俺を疑ってる」

それは、慰めでもなんでもない客観的な事実だ。

俺は、俺が犯人ではないという自覚がある以外は限りなくクロに近い場所にいる。

これまでの事件のほぼ全てでその近くに俺が位置されている。

「だから、……いや、流石に銃を向けられたときはちょっとショックだったけどよ、今はもう落ち着いてる。だから、俺は良いんだ。蔵臼伯父さんも、……楼座叔母さんも気にしないでくれ」

「戦人君……」

「その代わり、と言っちゃアレだが……教えてくれ、二人が、何をしていたか。蔵臼伯父さんと楼座叔母さんが、俺たちと別行動をしていた時に何かを見なかったか。嘉音くんと紗音ちゃんとの約束のためにも、俺はこの事件の犯人を突き止めたいんだ」

だから協力してくれ、教えてくれ、と告げる俺。

「約束……？　紗音と嘉音が？　本当かね？」

「ああ……。譲治の兄貴や、朱志香を殺した犯人を見つけてくれって、二人とも……」

「そうか……そうなら、二人のためにも生き残って犯人を見つけなければならんな……」

しみじみと呟く蔵臼伯父さんを見て、ふと先ほどの伯父さんの発言を想起する。

「……蔵臼伯父さん、さっき、二人は“屋敷の中を走り回ったが我々以外は誰も居なかった”と言ってたっすけど、二人はどの辺を？」

「ん、そうだな、楼座を追いかけて……一階の客室から出た後は二階客室――昔は楼座の私室だった部屋で落ち着かせていた。およそ15分ほど……だったと記憶している」

「なるほど……」

俺達が2階客室で決裂して口論になったのが確か12時20分から数分過ぎた辺りだと思う。

嘉音君が撃たれてから源次さんが紗音ちゃんを呼びに行って、それが7分ほど経過しても戻らないから、とその後を俺と南條先生は追いかけて厨房へと走った。

厨房に着いたのが12時50分で、その5分後には俺達はボイラー室に突入している。

時系列としては、

嘉音君が撃たれる→楼座叔母さんと蔵臼伯父さんが離脱→源次さんが離脱→7分経過(この間に嘉音君が息を引き取る)→厨房へ向かう→厨房へ到着→ボイラー室へ突入(厨房へ向かってからボイラー室までは7分強)→紗音ちゃん発見

ならば、二人の言を信ずるのであれば二人のアリバイは保証される。

「そちらは？　私達があの客室を出て行ってしまったあとはどのように？」

「俺たちは二人が外に出てしまった後、まずは源次さんが厨房に紗音ちゃんを呼びに行った……が、源次さんは戻らなかった。その後俺たち二人も徒に分散するのは危険だ、とその後を追って厨房へと走ったが、既に遅かった」

動転していたとしても、源次さんを一人で行かせてしまったのは致命的な失策だったと言わざるを得ない。
俺たちが厨房に付いた頃にはもう既にそこには誰も居なくなってしまっていた。

「ふむ、厨房はもぬけの空……。争ったような跡は無かったのかね？」

「ああ、無かったぜ。壊れてたり、椅子が倒れてたり、そういうのも全く無かった。忽然と消えた……とでも言わんばかりだ」

しかし、厨房に人気が無かった、ということは最悪の事態ではあるが、同時に想像できない事態という訳でもない。
俺たちがばたばたと駆け回っている間に潜んでいる犯人が俺たちを順番に殺し回っている、という可能性はなんら否定されないからだ。

ただここで俺が引っかかっているのは、厨房のドアは開け放たれていた、ということだ。
厨房でも南條先生と共に軽く話したが、外から破壊されていたならそれは外から押し入られていることを意味するが、あのドアは内側から開け放たれていた。
つまり内側からそこに居た人物が外に出て行ったのだ。

……無論、犯人による偽装工作と見ることもできる。

内側から自発的に使用人が消えた――そう思わせられるということはチェス盤をひっくり返した時、元からその場所に居た人物を怪しませられる、という事になる。

ここが、……引っかかる……。

……俺は、もう使用人だから、とか、相手が旧知だから、とか、親族だから、とか……そういうのを半ば無視して推理を進めつつあった。

であるが故に、使用人を疑わせよう、という意図を持った行動ならば、それはもはや無意味だ。

しかし同時に、あの厨房には、ノイズがもう一つあった。

「……洋形封筒……」

「ん？　どうしたのかね、戦人君？」

「厨房には洋形封筒が落ちていた……。……あ、いえ、俺がカッとなってびりびりに破いちまったんですが……ともかく、内側には犯人の痕跡があったんすよ」

「封筒……朝の事件や、昨夜の晩餐の席でのあれのような物かね？」

「ええ、でもあの内容は……」

アレは挑発だ。或いは、愚弄。

紗音ちゃんと嘉音くんへの、明確な愚弄。

譲治の兄貴と朱志香の尊厳を嘲笑い、二人を大切に思っていた紗音ちゃんと嘉音くんをも虚仮にする、悪魔の手紙だった。

「分からないんすよね……。手紙の内容としては使用人のみんなを第四の晩以降の生け贄に選ぶこととした、ってだけなんすけど、執拗に……その……譲治の兄貴と朱志香を馬鹿にしたようなことが書かれていて、悔しければ自分に挑んでみろ、なんて書いてあったすけど……」

言葉尻がどうしても濁る。

それは、……あの場では俺も怒りにまかせてあの手紙を破り捨てはしたものの、……あの手紙における犯人の二人への評は、……真に迫るものがあったように思うからだ。

『譲治は誰にでも優しい好青年、といえば聞こえは良いがその実、意志薄弱な金持ちのボンボン』

『朱志香は活発で活動的、といえば聞こえが良いがその実、がさつで礼儀すら碌に知らぬドラ娘』

手紙の内容はそのような物だったが……。

なるほど、……あの二人を、悪意を以て観測するのであれば、そういう見方も出来るだろう。

確かに、譲治の兄貴は優しい。が、同時に気の弱い部分、押しの弱い部分はあると思える。

朱志香も活発で男友達と接するような感覚で話しやすい。だがそれが右代宮家の令嬢を評するのに相応しいのか、と問われれば俺は何も言えなくなってしまう。

つまりは、どちらも――それが絶対の真実という訳では無い、という前置きを挟みつつも――正しい一面はある、と思えてしまうものだ。

無論、この二人への弄言は紋切り型で定型的だ、という見方もできる。
心優しい富豪の令息と、活動的な富豪の令嬢。この二者を愚弄するのであれば、捻らなくともこういう内容になるのは目に見える。俺だって何が何でも二人を馬鹿にするような文面を用意しなくてはならない、となればこんな感じの内容を用意するだろう。

その意味では犯人がこういった内容の愚弄を行ってくることは理解できる。
しかし、……しかし、だ。

しかし、それを紗音ちゃんと嘉音くん宛ての手紙の中で記述してくるならば、話は変わる。
親族全体、譲治の兄貴と朱志香を知る者達全員に向けてこの手紙を出してくるならばただ単なる挑発と受け取れる。
だが、それを紗音ちゃんと嘉音くんを名指しで記述するのなら、俺はこう思ってしまう。

『あの手紙を書いたのは俺たち右代宮一族の事をよく知る誰かなのではないか？』

これならば、多くの要素に説明が付けられ……、……。

……いや、その考えでは足りない。
その推論は、俺の甘えだ。

甘えを捨てろ、右代宮戦人。
この謎を解体するために、紗音ちゃんと嘉音くんのために、ほんの少しで良い。
ほんの少しだけ、人でなしになれ。

……この犯人は、まるで魔女だ。

人間のものとはまるで思えない残虐な犯行。
一見して人間には不可能な密室殺人。
あまりにも不可解な消失現象。

本人が語る通り、魔女であると考えた方が思考の手間がかからない。

魔女なのだから残虐で、魔女なのだから人間に不可能なことも可能で、魔女なのだから不可解な現象も発生させる。

全ては不思議な杖と魔法によって行われた犯行で、どんな不条理も呪文と共に杖を振れば簡単に済む。
本人が自分は魔女だと語っているのだからそれで良いじゃねえか。

いや、馬鹿を言うな。そんな甘えは許されない
俺には絶対に叶えなければならない約束がある。

だから、何故この犯人が魔女を自称するのか、という所から考えなくてはならない。

人間のものとは思えないほど残虐で、人間には不可能な密室で、人間では不可解な現象を、それでも人間を行ったと信じるならば。
俺は、何故この犯人が魔女を自称するのかを推理する必要があるのだ。
だって、犯人はこんなにも「自分は魔女だ」と主張している。
ただの事件として考えるならこの執拗さは不合理だ。そこまで主張する必要は微塵もない。

……俺は、……俺は、この犯人の思考を理解したい、と思い始めている。
チェス盤の向こう側に座るこの犯人が、何を目的としてこの手番を指しているのかを理解したい。

魔女を狩るためには、事件を解決するためには、謎を解き明かすためには、きっとそれが必要だ。

『あの手紙を書いたのは俺たち右代宮一族の事をよく知る誰かなのではないか？』
それが俺の脳内に構築された推理だ。
そして同時に、甘さを捨てきれない逃げの一手でもある。

だから俺は、そこからさらにもう一手、進めよう。
真実に至るために、俺は人間の倫理を半歩踏み越えなくてはならない。

……そうだ。犯人が、魔女が、人の倫理の先にある存在だとしても。それは、人の倫理という“足場”の上に在るものの筈だ。
故に、こうも言える。
いくら人間のものとは思えない犯行が行われたとしても、そこに至るまでの過程は存在する。

……俺は、犯人の思考を理解したいと思い始めた。
つまりそれは、犯人の動機、ホワイダニットについて想いを巡らせ始めた、ということだ。
推理小説で探るべき三つの論点。
誰が/フーダニット。
どう/ハウダニット。
何故/ホワイダニット。

俺はかつて――六年前に、紗音ちゃんとのミステリ談義において、このような戯れ言を吐いた事がある。

「人の心ってのは、すごく重要だと思うんだ。人間が、殺人を決意し、計画し準備し、実行に踏み切るには、ものすごい大きな心の力が必要なはずなんだ」
人は、心で動く。
転じて、人を殺せるのは心だけなのだ。
殺したいほどの感情の高ぶりの挙句に、起こるのが殺人という悲劇だというのなら。

ならば、この犯人も、……この魔女にも、この惨劇を起こすに至る動機が存在する筈だ。

……チェス盤を、ひっくり返す。

魔女からの手紙。
魔女が、名指しで挑発するに至った、紗音ちゃんと嘉音くん。

魔女を名乗る犯人は、この二人を明確に意識している。
ならば、逆に考えよう。
この二人が意識される理由とはなんだ？

六軒島というこの土地を一つの舞台――否、盤面と捉えた場合、俺たち一族と使用人、南條先生はその上に並べられた駒だ。
犯人がその駒を操るプレイヤーであるのなら、紗音ちゃんと嘉音くんに干渉するに足る理由――戦術と呼び変えても良い――がある筈だ。

それはつまり犯人の動機の一端であり、この魔女のホワイダニットに他ならない。

……そこまで至った瞬間にぴたり、と。
ピースが嵌まる。

俺は今まで、犯人Xの目的を測れずに居た。何がしたくて事件を起こしたのか、何を求めて碑文になぞらえるのか。それが見えていなかった。それが見えていないにもかかわ

らず、犯人を見つけて欲しいという願いを託されて盤面と睨めっこをしていた。

しかし、今、俺は何かを掴んだ。

俺の考え方は根本的に探偵のそれではない。俺の考え方は、六年前に培ったミステリを食む経験と霧江さんから教わった思考術で成り立っている。

故に、ミステリの三要素。

それを用いてチェス盤をひっくり返す。

この事件の三要素を解きほぐすのではない。

俺はベイカー街に居を構える探偵ではない、無色の束の中に混じった緋色の糸を探すようなやり口は似合わない。

俺はただ強引に、いっそ暴力的なまでにシンプルに視点を切り替える。

相手の思考が読めない、相手の打ち筋が理解できないというのなら、異なる概念が必要だ。

未知の概念を仮定するもの、方程式における未知の値、つまりは変数。

この事件を構成する犯人X、という変数に倣い、手段をY、動機をZとしよう。

つまり、「犯人X/フーダニット」＋「手段Y/ハウダニット」＋「動機Z/ホワイダニット」＝この事件なのだ。

このXYZの変数に実際には何が入っているかを求めることができたなら、その時この事件は解決される。

変数を三つ持つ連立方程式の解き方は簡単だ。
三つの内、二つを使ってどれか一つの変数を消す――解決してしまえば良い。

先述の通り、俺は犯人Xの目的を測れずに居た。だが、今俺はZの変数を消す鍵、気付きを手に入れた。
ここで数式をひっくり返せば動機Z＝この事件ー犯人Xー手段Y。

動機Zには既に「紗音ちゃんと嘉音くんへの挑発」という名の係数が設定されている訳だから、これを元に俺は、『あの手紙を書いたのは俺たち右代宮一族の事をよく知る誰かなのではないか？』という推理をもう一度見つめ直す。

……右代宮のことをよく知る人物、というのも曖昧だ。これをもう一度約分するならば、『譲治の兄貴と紗音ちゃん、朱志香と嘉音くんの関係を知る者』という範囲にまで縮小される。これであれば変数Xに代入され得る数は激減する。全人類という潜在的な犯人Xの範囲が、『この二組の関係を何らかの形で知る人物』という極小範囲にまで縮小される。

だがこれでも一手、……いや、二手足りない。
この係数のままでは、いくら頭を捻ってもXの中身は判別できないし、事件の解決も不可能だ。

……何故解決できないのか。
それは俺が一番分かっている。

……だから、俺は、……。

「譲治様を殺した犯人を、……例え、戦人様が、今この島に存在するニンゲンの誰をも疑いたくないのだとしても、それでも」
「戦人様の手で、この事件を解き明かし、真相を暴いてください」

「ぼくから、も……おねがい、します……
……この、じけん……はんにん……」
「おねがいします……真相……朱志香、お嬢様……、ころした犯人……みつけ、……だして……」

「やくそく……。ベアトリーチェさまの、しょうたい……、じょうじ様、を……殺した、はんにん……見つけ……て……」
「おねがい、します……しんじつ、を……」

二つ――いいや、三つの約束を胸に、己が認識を封じていた枷を、自ら外す。

苦い決断。そしてそれと同時に、再び発展を開始する推理の樹形図。
一線を越える思考。
全ての登場人物は駒へと昇格され、喪われる命は盤上のやり取りと同列となる。
この事件の筋書きは相手の戦略によるもので、俺はそれを解き明かすことで妨害する。それがこの対戦の勝敗を決めるのだ。

そして身内を疑う、という禁忌すら完全に破り捨てた以上、もはやこんな第一段階で止まっていては遅い。

右代宮家の内部事情に詳しい外部犯Ｘという、無限数の中から存在するかも怪しい解を探す行為では遅すぎる。
今まで俺は警察が来るまでをこの事件のタイムリミットと考えていたが、そんなものでは足りねえ。もっと、もっと、もっと早く。
六年も待たせた俺には、ロスタイムなんて無いと思え。
この親族会議は本来10月4日と5日の2日間のみが日程として与えられていた。なら、俺もそこまでに解決してやる、という気概を持たねばならない。
だから、それでは遅いのだ。全てが終わってしまう前に、全てに間に合うように、俺がこの事件をばらばらに解体してやらないと駄目なんだ……！

ノックス十戒の、第1条の内容を思い出す。
無論、これはミステリ小説などではない。俺にとっては現実に発生している連続殺人だ。しかし、嵐によって孤島に閉じ込められている当事者だからこそ断言できる。

犯人は、この島に居る。
少なくとも、俺たちが嵐に閉ざされた六軒島に閉じ込められるまでには犯人はここに到着しており、そして昨日の夕方には真里亞に手紙を渡している。
この天候と海模様では島から出ることはできない。
犯人は親族会議が始まった段階で、既に六軒島という盤上に存在していなくてはならないのだ。
転じて、【ノックス第1条、犯人は物語当初の登場人物以外を禁ず】。

これならばXに代入し得る数の大部分をこれで抹消できる。
残る猶予、犯人は……俺たち18人か、魔女か。
しかし、魔女は存在しない。居るとしてもそれは魔女を名乗るニンゲンに過ぎず、名前も分からないジェーンドゥ。
一人に満たない登場人物、19人目を満たさない小数点以下のニンゲンだ。

よってこの島の在島人数は、18<X<19。
小数点以下の人数、というおかしな表現ではあるが、それが何処かしっくりきた。
居るのか居ないのかが判別できない不可解な登場人物。居るということになってはいるが、実在はしない架空名義。

18<X<19。
……言い得て妙な表現だった。
存在しないのにそれを名乗る誰かだけがいる、という登場人物は、整数を満たさない。名前だけしかそこには存在しないからだ。

……それは、ある仮説を、推理を、――疑念を意味する。
しかし、俺は覚悟した。だから、俺は逃げる事無くその問題を提起する。

即ち。

『あの手紙を書いたのは俺たちの中の誰かではないか？』

『俺たちの中に、この一連の流れを仕組んでいる誰かが存在するのではないか？』

これまでの事件において偶発的な因子は存在するのかもしれない。楼座叔母さんと嘉音くんの同士討ちはその最たる物だろう。

だが、それを差し置いても全ての惨劇はその上で駒を差配する対戦相手の意図したものの筈だ。

明らかに恣意的なタイミングで不通となった無線機、いとこ組の中で俺だけを生残させることによって撒かれた不和の種、事件の発生場所を飛び飛びにすることで俺達を孤立させる計画。

これらの全てが犯人の手番であるなら、俺達はその全てに対して悪手を執り続けていたに等しい。

紗音ちゃん以外の、消息を絶ったまま見つからない三人の使用人達も、既に相手の手に落ちていると見て良いだろう。

行方不明の祖父様も含めるなら相手には四つの手駒があり、俺達も残りは四人。数は等しいが、……朝から考えていた俺の推理を、手段Yに代入するのであれば、密室は使用人を共犯――脅迫でも何でも良いが――にすればおそらく解決する。

ベアトリーチェ、という人物X。それが仮に存在するのであれば、その動機Zは今の俺が知る情報からは推定できない。

しかし、それでも、俺たち18人の中にベアトリーチェという0.X人分の小数点以下の仮面を被った人物が紛れ込んでいるのであれば、現状の俺の考え――XYZ説とでも呼ぶが――の全ては成立する。

そう、『犯人Xは、俺たちの中に居る』
故に、『俺たちの中に居るから、何らかの動機Zによってあんな手紙を書く行為に出た』
だから、『手段Yを用いて密室殺人や不可解な事件を可能としている』

こうして、犯人X＋手段Y＋動機Z＝この事件、の図式が成立する。

魔女を名乗る犯人によって引き起こされた、連続殺人事件。
この方程式の成立によって、ついに俺はこの事件に巻き込まれた登場人物としてではなく、この事件を解決するビジョンを持つ探偵へとなった。

……だが。……まだ、情報が足りない。

確かに、朝の時点では俺は使用人が犯人或いは共犯ならば六人殺し――第一の晩の殺人は解決できると考えていた。
そのまま推理を進めるのであればあの時点で犯行が――少なくとも密室の構築に関してはだが――可能だったのは俺が紗音ちゃんと共に本館に戻った際に姿を見ていない人物に絞られる。
その三人というのは嘉音くん、源次さん、祖父様の三人となるが、しかしその内の嘉音くんは楼座叔母さんの誤射によってやられ、源次さんと祖父様は行方不明だ。
嘉音くんが犯人であるのなら、楼座叔母さんに誤射された後も事件が続いていることがおかしくなってしまうのでこれは一旦除外する。
ならば源次さんと祖父様が必然的に怪しい立場として盤上に残るのだが……。

「(……祖父様は、……本当に“居る”のか？)」

脳裏でその疑問をもう一度噛み直す。
俺は一度、怒りに身を任せてではあるが、その可能性を口にしているのだ。
先ほど、親父と霧江さんが殺害された客室において、楼座叔母さんからの追求を受けた際にその可能性を口にしている。

祖父様は昨日の昼から昼食にも夕食の席にも降りてきていない。
昨日の段階では俺は朱志香の「ここ数年祖父様は怪しげな研究に没頭して部屋から出てこない」という言葉を真に受けて「昔は礼儀に五月蠅かった祖父様も変わっちまったもんだなー」などと思っていた。
しかし、今朝の事件が発覚した時点でそれは疑念に変わりつつある。

俺は昼の時点では「祖父様は親族会議のゴタゴタを嫌って最初から部屋にいねえんじゃないのか、蔵臼伯父さんはそれを知っていて黙っているんじゃないか」と叫んだが、もはやそういう問題ではない。

祖父様は数年前の時点で「余命半年」との診断が下されていた、という話は昨日の昼に聞いている。
そして、親父を含めて親たちが皆会社の経営や事業の資金繰りに困っているらしい、という話もだ。
またそれに加えて第一の晩の六人殺しが発覚した段階では、源次さんは「お館様は「部屋から出るつもりはない」と仰っておられました」と言っていた。
それはいくら何でもおかしいだろう。息子や、娘、婿に嫁、孫まで複数人が死んでるの

にまだ引きこもりを続けた挙句、最後には気が付いたら消えていた、だ。
祖父様の現状は流石の俺でも何かおかしいだろうとは言わざるを得ない。

チェス盤をひっくり返す。
祖父様は俺達の前に姿を見せない。
如何なる状況においても、祖父様を直接視認できていない。
これを逆の視点から解決する解は二つある。

一つは、祖父様が俺達を徹底的に避けていて、連絡の手段すら断っているため事件の発生をすら知らない可能性。
しかしこれは源次さんが祖父様に会ってきた、という証言をしているため矛盾する。

源次さんが嘘をついている可能性は十二分にあるが、「どちらの方向に」嘘をついているのかが判別できない。
源次さんが「祖父様に報告をした」という嘘をついているのか、「報告をした」という嘘をついているのか。

そこで、この矛盾を解決するための二つ目の解。
そもそも、祖父様は俺達が関与できる場所に居ない可能性。

……関与できない場所、というのは死んでいる、という意味を含む。
……ここからは俺の邪推になるが、蔵臼伯父さんは親族会議の資金繰りについて何らかの計略があって、祖父様の不在を誤魔化しているのではないだろうか。
例えば、……うーん……、祖父様は既に死んでいて、蔵臼伯父さんはその遺産を独り占

めしようとして死亡を隠している、とか？
……いや、流石にそれは突拍子もなさ過ぎるが……祖父様が生きているか死んでいるかは度外視するが、どちらにしろ祖父様は居ない、と考えたのが論理的だ。
そもそもこの親族会議が始まった時点でもう居ない、もしくは死んでいてそれを誤魔化しているか。そのどちらであっても動機は遺産関係の事情、と仮定すればホワイダニット的にも成立する。

そうなれば考えるべきは祖父様の行方だ。
死んでいるのであれば死体がどこに在るかはどうでも良い。
しかし、生きている場合の居場所が問題だ。
島から先んじて脱出している？　或いは島内の何処かに……いや、島内に屋敷とゲストハウス以外にそんな場所は……。

……待てよ？
そういえば、さっき……。

「――蔵臼伯父さん、ちょっといいすか？」
「ん？　ああ、なんだね？」

客間の空気は先ほどに比べると明らかに弛緩している。
だから、俺が蔵臼伯父さんに声をかけても楼座叔母さんや南條先生の雰囲気がピリつくことも無い。ただ単に質問をしたかっただけだ。
――なのに。

「さっき、話の流れで一瞬出たワードなんすけど……隠し屋敷ってなんです？」

「っ……」
「う、む……」
「……」

……また、客間内に緊張が奔る。
ハッ、と俺を見上げる楼座叔母さん。
苦々しげな顔をする蔵臼伯父さん。
ちらり、とこちらを見る南條先生。
三者三様の反応ではあるが、皆共通して俺の言葉に反応した。
……どうやらこの「隠し屋敷」というフレーズには、なにやら皆含むところが在るらしい。

普段の俺ならば語りたくない、といわんばかりの空気に俺も口を噤むところだが、残念だが今の俺はそんなもんじゃ止まらねえぞ。

「蔵臼伯父さん。俺は犯人を見つけたい。相手がベアトリーチェを名乗る人物であるのなら、さっきの「ベアトリーチェの隠し屋敷」なるものに犯人が潜んでる可能性もある。仮にそんな建物が無いとしても情報は有るにこしたことはねえ」

無論、俺がこの話題について切り出したのは祖父様の所在についての考察を深めるためだ。
なので極論、隠し屋敷なんて無い、という回答が返ってくるのならそれはそれで良い。無いなら無いで考察要素から除外するだけだ。

しかし、この反応を見るに、……そうでは無い？　実際にあるかどうかはさておき、俺が知らないだけで何らかの情報が出てきそうな気配があった。
　これは僥倖かもしれない。もしかすると……犯人Ｘが被っている「ベアトリーチェ」という小数点以下の人数についての情報を得られるかもしれない……。
「……そうか。……うむ、そうだな」
　教えてくれ、という圧を込めて視線を送れば、蔵臼伯父さんは重い口を開き始める。

◇　◇　◇　◇　◇

……さて、まず最初に……ふっ……。戦人君、不躾な話だが、親父の……右代宮金蔵の愛人の噂について聞いた事はあるかね？
「愛人……？　そんな話は……、……あ、まさか……」
　勘付いたかね？　そうだ、親父は常日頃ベアトリーチェ、ベアトリーチェ、と繰り返していた訳だが、我が右代宮家の中においてその人名らしきものが何を表すのか、については複数例を考える必要が有る。
　まず一つは、親父が語る「右代宮家に金塊を与えた恩人」。これは……、今は置いておこう。
　二つ目は、親父の脳内に住まう「親父の執着相手」としてのベアトリーチェ。これは妄想幻想の類いだ。……朱志香辺りもそう考えていたようだがね。

しかし、三つ目。これは私の母や私達兄弟の全員が脳裏に思いつつも明言することを避けていた話だが……「親父の愛人」だ。

昔から、親父は急にふらりと姿を消す事が多くあった。

そんな時、私達は「ああ、また親父が何処かへ出歩いているのか」と陰口を叩いていた物だが……、同時に、こうも思っていた。

「親父は愛人の元へと通っているのでは？」とね。

「それが、隠し屋敷……？」

そうだ。もとより、この屋敷には怪談話が付き物だった。深夜に誰かが屋敷内を出歩いているのを見た、だとか……森の奥から誰かが見ていた、だの……。

古い使用人に至っては肖像画の魔女が出歩いているのを見た、という噂をしている者まで居た。

当時の私はくだらない怪談話だと表向きは笑い捨てていたが……私や絵羽、そして私達の母親はほぼ間違いなく「居る」のだろうと確信していたよ。

そも、この屋敷を建てさせたのは親父殿だ。そして当時は莫大な財力を持ち合わせた親父の全盛期と言って良い。親父しか知らない隠し扉、隠し部屋、隠し通路……そんなものが存在するのではないか、という噂は絶えず、そして親父には実際にそんなものを作ってもおかしくは無い狂気が有った。

戦人君や、譲治君、朱志香にとっては六軒島の魔女伝説、「森には魔女が住んでいるから立ち入ってはならない」というのは島の開

発されていない区画へと子供を立ち入らせてはならないおとぎ話だったろうが、……私達にとってみれば「屋敷の外は親父が支配する領域」だった訳だ。

無論、私達も数十年この島に住んでいる訳だからね。幾ら隠し部屋や隠し通路の様な者があったとしても、人一人を丸ごと秘匿して抱え込めるようなスペースがないことはとうに理解している。

しかし、屋敷の外は別だ。

留弗夫の好きな言葉だが、悪魔の証明、というやつさ。

「悪魔が存在することは悪魔を連れてこれば証明できるが、悪魔が存在しないことはありもしない存在しない証拠を持ち出さねえといけないから立証できない、みたいなやつでしたっけ。つまり、……愛人が居ることは愛人を見つけ出せば証明できるが、愛人が居ないことはこの島の全てをしらみつぶしにしないと確実ではない？」

その通り。そしてそれは不可能だ。

……女性の生活必需品が多いことは知っている。

そして親父が、お袋よりも愛していたであろう女性に不自由な暮らしをさせる訳もない。

ならば、電気水道などのライフラインも全てが整備された邸宅が存在すると考えるべきだが、……ふっ、言っている私も馬鹿な話だと思っている。非現実的な、右代宮金蔵伝説が生み出した幻想だとね。

だが、やはりこうも思うのだよ。

親父ならやりかねない。隠し屋敷は存在するのではないか、とね。

「……そうですな。金蔵さんならば、やりかねん」

南條先生こそ何か知りませんか？　親父殿とは古くからのご友人なのでしょう？
墓に持って行く話の一つや二つあると見ますが。

「およしなさい蔵臼さん、確かにそれはありますが、墓に持って行く話は墓に持って行かなければならない話だからこそ秘めておくものです」

ははは、それはそうだ。私にも墓まで持って行く話の一つや二つある。……ふっ、楼座は？　墓までの話はあるかね？

◇　◇　◇　◇　◇

話の流れで蔵臼伯父さんが楼座叔母さんに水を向ける中で、俺は今蔵臼伯父さんから得られた情報を頭の中で精査していた。

愛人の噂、隠し屋敷。
なるほど、それならばあり得る。
祖父様はこの島に居ながらにして、同時に俺達の手の届く場所にいない。
音信まで全て絶っているのであれば、事件の情報も届いていない可能性だってある。この仮定を代入するのであれば、祖父様の所在はその隠し屋敷であり、同時にこちら側の情報が届いていないため反応がない、という推理も可能になる。

……いや、それにしたって源次さんは何をしてるんだ。
源次さんが祖父様の腹心中の腹心であることは分かる。だが、腹心だからって、祖父様の怪しげな黒魔術研究とやらを優先させて家族の死を知らせもしない？
腹心であるのならそれこそ隠し屋敷への生き方だって知っているだろう。なのに、そうしない？

……やはり、居ない？

……もし、もし仮にだが、先ほど俺が一瞬考えていた『祖父様は既に死んでおり、蔵臼伯父さんが親族会議に際して何らかの理由でその死亡を伏せている』というのが真実だった場合、現状の俺の推理である『蔵臼伯父さんと楼座叔母さんの二人は、少なくとも片方はほぼ間違いなくシロ』という考えをひっくり返す必要がある。

その最たる理由が源次さんだ。
……正直に言ってしまうと、源次さんは現状俺の中でかなりクロに近い位置にいる。
源次さんであれば朝の密室も解決できるし、親父と霧江さんの事件は別として使用人が消えていることも紗音ちゃんを殺害した謎の人物についても説明できるのが大きい。俺が源次さんを完全なクロだと断言しないのは源次さんには第二の晩の殺人がどうやっても不可能であること、そして現状の行方不明という状況が「犯行の機会を窺っている殺人犯」だからなのか、「既に凶刃に倒れた犠牲者」なのかが判別できないからだ。

だがもし祖父様が既に死んでいた場合、源次さんはそれを確実に承知している筈だ。祖父様の死を隠蔽するならば、この屋敷の執事

にして使用人を束ねる家具頭というポジションの源次さんを抱き込まないとそれは成立しない。
そしてそうなると、蔵臼伯父さんと源次さんの間にはラインが存在することになる。
現状被害者なのか容疑者なのかも判別できない源次さんと、俺が推定シロだと思っている蔵臼伯父さんの間に、だ。
これを以て、蔵臼伯父さんはシロではない、と言ってしまうことは出来る。
現状限り無くクロに近いグレーである源次さんと祖父様が死んでいる、という事実を共有しているのであれば。また蔵臼伯父さんもグレーである、と断言することも出来る。
……蔵臼伯父さんの先ほどの態度……、俺と南條先生を心底恐れているからこそ、俺達の行動を警戒するあの空気……。
……チェス盤を、ひっくり返す。
確かに、蔵臼伯父さんは怪しく見える。
しかし、だからこそ、その視点をひっくり返す。
俺は先ほどの親父と霧江さんがやられて疑いを掛けられた際に『蔵臼伯父さんと楼座叔母さんにもいとこ部屋の犯行は可能だった』と叫んだが、冷静な状態でそれをもう一度検討すると、それは不可能なのだ。
俺が目を覚ましたのは午前七時。その時点でいとこ部屋には俺以外の人物は居なかった。
そして【俺は七時四十五分までに蔵臼、親父、霧江さん、楼座叔母さん、紗音ちゃん、源次さん、郷田さん、熊沢さん、南條先生を本館で確認している】。

【俺がいとこ部屋の前で事件発生を認識したのは午前八時頃】。
これだけを見るので有れば、蔵臼伯父さんが俺の後に客間に来た、ということから『蔵臼伯父さんには俺がいとこ部屋を離れた後に密室を構築することが可能だった』と強弁する事ができる。しかし、それは出来ないのだ。
なぜなら、あの『いとこ部屋の密室はおそらく中に誰かが潜んでいなければ成立しない』。そして【蔵臼伯父さんは俺が本館からゲストハウスに戻るまで常に俺の目視下にあった】。
つまり、『蔵臼伯父さんにはいとこ部屋の密室構築は不可能』なのだ。そしてこれは楼座叔母さんも同じであり、いとこ部屋の密室構築が可能だったのは一度俺の視界から外れた人物、或いは朝の段階では俺が目視していない人物だけに限定される。

……それは嘉音くん、祖父様、そして源次さん。そう、源次さん。

蔵臼伯父さんの先ほどの態度は本物だった。
それは俺が目前で観察したからこそ、断言出来る。
蔵臼伯父さんは、一連の殺人には関わっていない。少なくとも、直接は。

源次さんと蔵臼伯父さんの間に祖父様の死亡を隠蔽している、というラインそのものは有る筈で、だというのに蔵臼伯父さんは殺人に関与していない。
ならばこれをひっくり返した時、俺は一つの可能性を見いだすことができる。

即ち『この事件は、蔵臼伯父さんによる祖父様の生死隠蔽問題とは別軸で発生しているのではないか？』という推論だ。

……祖父様はそもそも居ない、蔵臼伯父さんはそれを知っている。知っているからこそ、親父が朝に「親父に指示を仰ごう」と言った時に渋ったのだ。

しかし、祖父様が居ないことと、この事件は別案件であり、蔵臼伯父さんはそれに関与していない。

最初から居ない筈の祖父様がさも居なくなったように語られたことで、祖父様の失踪がこの事件に関与しているのではないか、という幻想が発生したのだ。

……この推理が正確かどうかは一度置いておく。

だが、この観点を持った事で、俺は一つ大事なことを思い出す。

昨晩。夕食の席において。
今朝。いとこ部屋の下に。
先刻。親父と霧江さんの部屋と、厨房で。
幾度となく見たあの赤い封蝋。

ベアトリーチェを名乗る犯人が送って来た洋形封筒。
あれらには、皆ことごとく、当主の指輪による封蝋が捺されていた。

この時点で、俺は考えておくべきだったのだ。

当主の指輪による封蝋がされている以上、現当主である祖父様の関与の線が一気に濃くなる。しかしそこで祖父様が居ないとした場合、遺された可能性は二つ。

一つは蔵臼伯父さんがそれを使用している。

そかしこれは論外だ。蔵臼伯父さんには犯行ができない。

第一の晩、第二の晩においてはその余地がなく、第五の晩においてもそれを行うことは難しい。

ならばもう一つは祖父様の死亡を知る何者かがそれを奪い、使用しているというもの。

狙い目はこちらだ。そしてそれが可能な――祖父様が死亡していることをうかがい知れる――人物Xは同時に俺達18人の内側にしか存在しない。その犯人Xがベアトリーチェを名乗って手紙を出してきているのなら……。

……なるほど、話が回り回って単純になって来やがった。

昨夜の手紙において、ベアトリーチェは右代宮家の顧問錬金術師を自称していた。

そしてこうも言っていた。「利子の回収の手始めとしてすでに、右代宮本家の家督を受け継いだことを示す右代宮家当主の指輪をお預かりさせていただきました」と。

つまり、ベアトリーチェが俺達18人の中のXであるのなら、そいつは当主不在になっていた右代宮家の家督を受け継いだ、この六軒島の主であるということだ。

……はっ、それは傑作だぜ……。

犯人Xは18人の中に存在するが、魔女にしてこの島の主であるベアトリーチェは幻想の小数点以下のペルソナだ。

犯人Ｘが当主を名乗る際の名義が黄金の魔女ベアトリーチェなのだ。

――しかし、ここで俺はあえて目を向けずに居た別の可能性に立ち返る。

……ベアトリーチェ、即ち魔女。それそのものは居ないと、俺は思っていたが……そんな俺の前に、蔵臼伯父さんの話が立ちはだかった。

祖父様の愛人、その隠し屋敷。祖母様がご存命の時代からその存在を疑われていたというそれは存在するのだろうか？

数十年に渡って森の中に秘匿された屋敷に隠れ住み、そうして今このタイミングで何らかの意図を以て事件を引き起こした？

そうなると考えやすい動機は……金銭や、復讐だろうか？　例えば……祖父様亡き後の遺産を受け取るべく親族を殺害しようとした……或いは、祖父様との愛人関係はその愛人が望む物ではなく、事実上の監禁に近い形だった、とか？

安楽椅子探偵では真相には至れないだろうが、推測は出来る。だから、仮にこの事件がその愛人によって引き起こされた、と仮定した場合、俺はどのように推理する事が出来る？

まず、愛人が居た、と仮定しよう。

俺達18人の外に位置するにも関わらず、島内に存在できる新たなる変数。

それを方程式に組み込んだ場合、俺はどのような推理が可能となるのか。

……まず真っ先に考えられるのはアリバイに関する問題だ。

19人目を犯人と考えることによって既存の18人のアリバイ問題を全て解決できる。

現状、第一の晩の六人殺しに関しては俺が観測しているから犯行の実現性がない、俺が観測していないから犯行の実現性がある、という形で推理を進めているため、それら全てをぶっちぎって犯行或いは密室の構築が可能になる19人目のXという仮定は魅力的だ。

だが……これは、どうなんだろう。

19人目のXという、俺が一度は切り捨てた登場人物。

魅力的だ。確かに魅力的ではあるが、……[紗音ちゃんと嘉音くんを名指しで挑発してきた手紙]という動機Zに関する係数にこの祖父様の愛人という19人目のXが合致しない。

……19人目のXを方程式に当てはめた際に、動機Zに当てはまる答えが推理できない。

数十年前から実在が囁かれていた愛人である以上、年齢はどんなに低く見積もっても楼座叔母さんより一回りほど上になる筈で、祖父様の生死も把握している筈だ。

隠者であるならばともかく女性なのだから屋敷に閉じこもって完全に一人で暮らせる訳もない。そうなれば使用人の……そうだな、熊沢の婆ちゃん辺りが女手として存在を把握している可能性は高い。

いや、それこそ源次さんだって把握しているだろう。祖父様への忠義が形になったような源次さんにとって、祖父様が祖母様よりも愛したであろうその愛人は一体どのような存在だったのだろうか。

と、そこまでを考えると、やはり不自然だ。

源次さんも、熊沢の婆ちゃんにも存在を認知されていたであろう祖父様の最愛の愛人。

そんな人物が、仮に百歩譲って実在していたとしても、右代宮家の本家の問題に首を突っ込んでくるのが分からない。

金が欲しかったのなら、そもそも祖父様にその旨の遺言をしっかり遺すように懇願しておけば良い話だ。

復讐がしたいのなら、わざわざこんな魔女伝説に則った儀式めいた大がかりな殺人事件など起こす意味が無い。

そしてそのどちらにしても、紗音ちゃんと嘉音くんを挑発するホワイダニットがつかめない。

そこまで考え始めると、やはり「19人目の愛人」……いや、「愛人にして19人目のX」という人物はこの六軒島という盤上には存在しないのではないか、と思えてしまう。

……いや駄目だ。そうなると、俺の考えであるベアトリーチェは俺達18人の中の誰かに紛れている、という推理でも紗音ちゃんと嘉音くんを挑発する動機を考える必要がある。

そもそもあの行動は不合理に過ぎる。

仮に紗音ちゃんと嘉音くんを挑発する必要があったとしても、あんな風に手紙を残す必要性はない。わざわざそれを残しておくのは誰かに見つけてくださいと言わんばかりの不用意な行動だ。

……そもそも、この事件は全体的にそうなのだ。

何故犯人は手紙を残す？

何故犯人は密室を作る？

魔女の犯行に見せかけたいのか？　奇怪な事件を起こせばニンゲンの犯行と認めたくない生存者達が魔女を信じるとでも？
何故犯人は、まるで挑戦するかのよう、に……。

……。

挑戦。……挑戦？　誰に？

……チェス盤を、ひっくり返す。

魔女伝説と碑文に沿った連続殺人事件。
まるで生存者に対してヒントを与えるかのように残される手紙達。
犯行を隠蔽する気など微塵もない派手な惨劇。
それらを起こす意味が、動機として存在するのであれば――。

「――居ないのよ……！　ベアトリーチェなんて居ない！！」

突然、居間にそんな金切り声が響き渡る。
驚いて顔を上げれば、楼座叔母さんが髪を振り乱しながら蔵臼伯父さんの腕を振り払っていた。

「落ち着け楼座……！　いきなり何だ、一体どうした？」

「ベアトリーチェなんて居ないのよ、だって、だって――」

ベアトリーチェは居ない。
それは自明の話だ。
親世代の認識としても、俺の認識としても、それは揺るがない。
だというのに。

「ベアトリーチェは、……死んでるのよ…。……わ、……私が殺した……！！」

「な、……何だって……！？　どういう事だよ、楼座叔母さん……！」

「で、でも、私が殺したわけじゃ……、で、でも……私が、あんな所に連れ出したから！やっぱり私が殺したの！　夢だと思い込もうとしたけれど、……でも、……やっぱりあれは夢じゃなかった……！！　だから、だからこの事件は……、ベアトリーチェの亡霊が、私に復讐しに来たんだわ……！！　うわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

狂乱する楼座叔母さんは何かの線が切れたようだった。
突然のことに誰もが言葉を失う中、楼座叔母さんはとりとめもない事を口走りながら髪を振り乱して頭を抱えている。

「お、落ち着け楼座……！　どういう事だ、冷静にならんか……！！」

「私は、私は悪くない……！　私は悪くないのに、あぁぁぁぁぁぁ！！　私のせいで、私のせいで真里亞も……！！」

「ろ、楼座さん……誰もあんたを責めたりせん……！　深呼吸なさい、水でも飲んで……。戦人さん、水差しをお願いします」

「お、おう……はいよ、楼座叔母さん、水だぜ……」

ふぅ、ふぅ、と息を吐く楼座叔母さんは震える手で俺の手から水の入ったコップを受け取ると、それをこくりこくりと飲み下してゆく。

……俺の手から渡された水でさえ、何の忌避もなく受け取って口にした所に、楼座叔母さんの動揺が垣間見えた……。

客間内にその荒い息が響く間、俺達は誰も口を開くことが出来ずにいた……。

◇　◇　◇　◇　◇

……ごめんなさい、取り乱してしまって……。

ええ、……あれは、いくつの時だったのかしら……。私が、……中学生くらいの頃、だったと思うのだけど、……ごめんなさい、ずっと、悪い夢だと思っていたから……。

「楼座が中学生、となると……およそ20年前ほどの話かね」

そうね……そんな昔になるのかしら……。

ある日のことよ、私は、……お母様にひどく叱られて、……ああ、そうだった……家庭教師の先生が、私の泣き言をお母様に漏らしてしまったのだっけ……。それで、右代宮家

に名を連ねる者として情けないと、ひどく叱られた日のこと……。
頭が真っ白になってしまって、……そうね、私、あの日に初めて、……物事には、立ち向かうでもなく、屈するでもなく、逃げ出すという選択肢があることを知ったの。……逃げ出したのよ、お屋敷から。
もちろん六軒島から抜け出して島の外に出るなんて出来ないし、でも自分の部屋では誰かが来てしまうでしょう？　だから私、居なくなりたかったの……、或いは、居なくなることで、お母様やお父様に心配して欲しかったのかも。
子供心の、反抗よね……。私は、森の奥へと向かったわ。遙か奥に行けば、右代宮の家から逃げられる……それとも、迷子になって心配させて、手をかけさせれば仕返しができると、そう思ったの。

「それで、……立ち入ってはいけないと言われていた森へ？」
……えぇ。浜辺へ出てから、海に沿うように。……特に理由があった訳じゃないわ。でも、島をぐるりと回って、反対側まで辿り着ければ、……誰も知らない場所があって、そこで一人になれる気がしたの。
でも、島の周りと言ったって、当然通れない場所もいっぱいある。その度に回り道をして、迂回して進んで……とにかく、奥へ奥へ……。

「……隠し屋敷へ？」
……。
道は、……無理ね。もう思い出せない。思い出せたとしても、……もう一度同じ道を進めるかは……。

……闇雲に、でたらめに、どこまでも歩き続けて……、ある瞬間、獣道のようなものに出た気がしたの。
その頃にはもう疲れ切っていたから、歩きやすい方向へと自然と向かっていったわ。そうしたら……。

「……、そうしたら、なんだよ……」

突然、目の前に、……高い、高い柵が現れたわ。
最初は回り回ってお屋敷に戻ってしまったのではないかと思ったけれど、……えぇ、その柵はお屋敷のものより高かった。私より1mくらいは高かったような気がしたから……少なく見て2mはあったかしら。
蔦に塗れて、とても不思議な、荘厳な雰囲気を醸していたっけ……。

私、あの頃は森の魔女、ベアトリーチェの伝説を信じていたから、使用人の人からは、恐ろしい存在だけれど、敬いを持て接すれば助けてくれることもあるって教えられていたから、日々に自信を失いかけていた私には、もう魔女様に助けてもらうことだけしか救いがないと思って……。

……柵の周りを回って、どうにか中に入ろうとしても、なかなか入り口が見つからなくて……。……いえ、もしかしたら、柵に入り口なんてなかったのかしら？

「じゃあどうやって入ったんすか？」

大木のせいで柵がひしゃげているところがあってね、そこからお洋服を汚しながらなんとか潜り込んだわ。

……信じられないことに、柵を越えても、まだしばらくは森だったの。歩いて、歩いて、歩いて……、そうしたら急に森が開けたわ。そこにはこの屋敷に比べれば小規模だけど立派なお屋敷と、その前に広がる花畑……。ここの薔薇庭園とは全く装いの違う、本当のお花畑で、とても可愛らしいものだった。

そして、……私は、彼女の姿を見た。
お花畑を一望できるガーデンチェアに、優雅なドレス姿で腰掛ける彼女の姿を見たわ。
……そうね。あの肖像画のドレスの姿をしていた……。

そんな光景は現実感に欠けていて、次に目を開いたら自室のベッドの中で目覚めるんじゃないか、と思って立ち尽くしていたの。呆然と、姿を隠すこともなく……。

だから、彼女は当然のように私を見つけたわ。初めはとても気怠そうな、物憂げな表情をしていたけれど、私の姿を認めると、驚いたように目を見開いた……。

彼女は言ったわ。「そなたは誰か」と。そこで私はようやく何の挨拶もせずに立ち入ってしまった事を謝らなければならないと思って、「右代宮楼座です」と名乗ったわ。そうしたら彼女、「金蔵の一族の人間か」と言ったの。
最初こそ、言葉の通じる相手だと思って安堵したけれど、すぐに血の気が引いたわ。だって、お父様のことを「金蔵」と呼びつけにできるような人、ということでしょう？……何か不興を買えば、すぐにカエルにでも変えられてしまうのではないか、そう怯えながら近付いて、……近付く度に、彼女とドレスと、お花畑とお屋敷と、……その全ての調

和が、あんまりにも現実離れして美しいことにさらに震えが止まらなくなったの。

……でも、私は幸運だった。魔女は私をカエルにしてしまうことはなく、そして私に向かいの空いた席を勧めると、「座るが良い。初めて訪れた者を庭へ招き、語らうのが妾の唯一の楽しみよ。……他に、何の楽しみもないがな」と。……そう、ほんの少しだけ悲しげに笑ったわ。

「……その人は、……本当にベアトリーチェだったと……？」

……分からないわ。……今となっては、……そうね。彼女は、森には恐ろしい狼がいるのに、どうやってそれをかいくぐって来たのか、と言ってたの。

「狼……そうか、留弗夫が幼い頃には、お父さんはそんな話をしていたことがあったな……」

お父様が彼女にもそれを聞かせたのなら、……あの柵が嫌に高かった理由も分かるわ。……あれは、大きな座敷牢だったのね。

狼が居るから森には入るな。……あれは方便で、……森には魔女を入れておくための大きな、大きな座敷牢があった。

「座敷牢……祖父様が、その愛人を、……その、……閉じ込めるための……」

……当時の私は、緊張と興奮で訳の分からないことを聞いていたわ。あなたは、本当に森の魔女、ベアトリーチェなんですか？　って。そうして、彼女は確かに「如何にも。妾がベアトリーチェである」と答えた。

でも、……確かに、魔女と呼ばれるに相応しい尊大な口調で、イメージ通りの人だったんだけど、……子供っぽいというか、……素直すぎるというか……世間知らずな印象だった。

……彼女、動物園も、学校も知らなかったのよ。映画館も、遊園地も、……水族館も。

私には、分からないの。

一体、彼女は、何者だったのか。そして、どういう生き方をしてきたのか。

私の自己紹介が済んだあと、私は逆に彼女の事を訪ねたわ。

……そうしたら、急に雰囲気が落ち込んでしまって……。……やっぱり、気怠そうで、物憂げな、……何かしらね、あれは。……もう会えない、何か大切なものを探しているような……。……。

いえ。事実上の軟禁状態だったのだろうから、……そんな自分の身の上に関する悩みだったのかしら。何か深刻な悩みがあって、……それを私に話しても何も解決しない、というような雰囲気が読み取れたから、私も悲しくなって……。

私と一緒に居ることさえ忘れてしまったかのようで、遠くをぼんやり見ながらずっと、ずっと無言のままだった。

当時の私は失言をしてしまったのだと思って、謝罪さえできる雰囲気ではなかったか

ら、彼女が私と一緒に居ることを思い出してくれるまでずっとずっと、黙っていた……。

……「そなたのいう動物園の動物と、妾になんの違いがあるのか」。高い柵に囲まれたお屋敷で、優雅に暮らしては居たけれど、檻に閉じ込められた動物たちと自分がどう違うのか。彼女には区別がつかないみたいだった。

……彼女からは不思議な話をたくさん聞いたわ。まるで魔法が存在するかのように語っていたのが印象的だったけれど……、彼女は、あのお屋敷から自分の意志で出ることができない、自覚のない囚人だったのよ。

だから、……私は、誘ってしまったわ。柵の外へ出てみますか、狼は居ませんから、って……。

……ああ、……ぁぁぁぁぁぁぁぁ……。あんなこと、言わなければ良かった……！！

彼女を連れて私は屋敷へ戻ろうとしたわ！でも、すぐに迷ってしまって、多少足場が悪くても、海が見えていればいずれは辿り着けるだろうと思って、……私が、私があんな足場の悪いところを歩かせてしまったから……！！

海が見たいと言っていた、クジラも、ペンギンもッ！！　私があんな崖を通ろうとしなければッ！！

私が！　私が殺したのよ！！　ベアトリーチェは、私が殺したッ！！

◇　◇　◇　◇　◇

「……ベアトリーチェは、崖から落ちたのかね」

静まりかえる客間の中で、蔵臼伯父さんの、努めて冷静であろうとする声が、寒々しく響いた。

「……」

楼座叔母さんは沈黙し、……足下に目を落としている。……床の向こうに、何かおぞましい記憶を、透かし見るように。

それこそが、何よりの回答だった。

このまま、何も言わずに、ただ静寂に身を任せたかった。その口火を切る役目を、俺も、蔵臼伯父さんも、南條先生も、誰も望んではいなかった。……けれど。俺には、それを確認する義務があった。今得られた情報の、最後の確認を、行わなくてはならなかった。だから。

「……死んだのか？」

「えぇ、死んだわッ！！　岩浜だったもの、尖った危険な岩がたくさんたくさん剥き出しになっていた！！　目を見開いたまま、すごい血が溢れ出して……たちまち真っ赤な絨毯を広げていった……！」

俺の言葉は、楼座叔母さんの最後の糸を断ち切ったようだった。

観念したかのように叫ぶ楼座叔母さんは止まらない。

「声も掛けた！　揺さぶりもした！！　でも返事はおろか、瞬きすらも、……いえ、瞼を閉じることさえしてくれなかった！！　私のせいッ！！　彼女はドレス姿だったのに、あんな動きにくい格好なのを知っていたのに、私が

岸壁を降りようなんて言ってしまったから!!」

「私は忘れていたわ！　お屋敷に逃げ帰って、誰にも言えなくて!!　すぐに救急箱を持って戻っていれば助かったかもしれないのに！　私は何もせずにベッドの中で深夜まで黙っていた……!!」

「これはその罰なのよ！　19年前のベアトリーチェが、自分を殺した私に復讐するために蘇って真里亞を殺した!!　私が！　私が真里亞を殺したのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッ!!」

ついには崩れ落ちて慟哭する楼座叔母さんに、誰も声を掛けられなかった。

……確かに、今朝から楼座叔母さんの情緒はおかしかった。

それは最愛の娘を殺されたから、というだけではない。怯えるようで、苛まれているようでもあった。

楼座叔母さんには、おそらく真里亞との親子関係において確執があったのだろう。真里亞の魔女的な人格、とでも言えば良いのか。奇怪な振る舞いを、楼座叔母さんは明らかに嫌っていた。そして、ともすれば、真里亞自身をも。

別に、楼座叔母さんは真里亞の全てを嫌っていた、と主張したいのではない。幾ら愛しい娘であっても、許容できない部分、というのは有るだろう。彼女の場合、それが暴力にまで発展してしまっていた、という事に問題があるのであり、そしてそれを彼女自身が悔いているというのがこの苦痛に繋がっているに違いなかった。

そうだ、楼座叔母さんは嘆いていたではないか。朝の、事件発覚の時も、俺に暴言を吐かれた時も。楼座叔母さんにとって、最も恐ろしいのは、真里亞の魔女的な人格、振る舞いではなく、それを忌避するあまり手を上げてしまう自分そのものだったのではないか。

だから、それが解消されることもないままに、真里亞そのものを喪ってしまった今の楼座叔母さんは、恐れている。自分の過去の咎が、真里亞を殺したのではないかと。

……その慟哭が、あまりにも胸に突き刺さるものだから、気が付けば俺は彼女のそばに跪いていた。

「……楼座叔母さん。その時、ベアトリーチェに息はあったのか？」

「いいえ。……目を、大きく見開いていた。頭から真っ逆さまに落ちて、岩の鋭い角にぶつけて、……頭部は陥没して裂けてたわ。……黄金の髪が、みるみると赤黒く覆われていって……」

「一目見て、死んだと確信できる外傷だったんだな？」

「えぇ、割れた頭の中身を見た……！　あんなに陥没して、あれを見て生きてて欲しいなんて、幾ら何でも虫が良すぎる……！！」

「だったら、ベアトリーチェは死んだんだ。……そして、あんたのせいでもない」

「っ、……」

「落ちて欲しくて岸壁に連れてったんじゃないんだろ？　ただ、森の中をむやみに歩かせ

るよりは、海岸沿いを海を見せながら歩かせたかったんじゃねえのか？」

「それは、……でも、それでも……！」

「だったら、……楼座叔母さん、それは事故だぜ。楼座叔母さんが殺したんじゃない」

「私が連れ出さなければ起こらなかった事故よ！？　私のせい、しかも私は血まみれの彼女を見捨てて逃げてしまった！！」

「……楼座叔母さん。ベアトリーチェが何を想ってるかは分からねえ。でもな、ベアトリーチェはきっと、何も分からないまま死んだんだろうぜ。楼座叔母さんに、海を見せてもらって……、そして、そのまま、一瞬で逝った。だから、これは事故なんだよ。それに、頭部が裂けて陥没してるなら即死だ。中学生の楼座叔母さんが怖くなって、逃げちまうのも無理もない」

「……」

「もう一度言う。それは事故だ。……だから、もう自分を責めるのはやめてやれよ」

「……そう、なのかしら……本当に……？」

「ああ、そうさ。……なんなら感謝してるかもしれねえぜ？　肉の器よりよくぞ妾の魂を解放した～ってな」

「……戦人君……」

楼座叔母さんも、俺の言葉が彼女を慰めるためのものだとは分かっている。俺の言葉を信じたところで、真里亞が返ってくる訳もない。けれど、それを分かった上で、楼座叔母

さんは俺の言葉を信じた、……信じようとした、してくれたのだ。自分のために、そして俺のために。
　ポケットから出したハンカチを差し出せば、それで涙を拭き取りながら、強がりではあるけれど微かな笑みを見せてくれた。
「……ありがとう、戦人君。……そして、ごめんなさい。私、戦人君にずっとひどいことを言ったわ」
「……気にすんなよ楼座叔母さん。……それにな、亡霊なんてものが居たとしても、それに人を殺す力なんて存在しねえ。人を殺せるのは、人間だけだ。……ベアトリーチェを名乗る、人間の犯人がみんなを殺したんだ」
「……そうね。そうかもしれない……」
　それっきり、楼座叔母さんは口を開かなかった。心の中で、何かの折り合いを付けるための沈黙。
　そして俺達もそれ以上、長い間楼座叔母さんに声を掛けることはしなかった。ただ、悲しみとほんの細やかな救いに身を任せる彼女に、それ以上の過酷を強いるような人間は、この客間には居なかったのだ。
　……だが、それは楼座叔母さんを抜きにした話、という部分だ。
「……楼座叔母さんの話が真実なら、……隠し屋敷は存在するって事になるな……」
「貴重な情報ではないかね戦人君？　もしや、この一連の事件にも、何らかの関係があるやも……」

「……いや、それは早計だと思うぜ蔵臼伯父さん。確かに、隠し屋敷が存在する、というのはこの事件の犯人Ｘにとっては有利に働く。俺達の関与できない空間で息を潜めて居られる訳だからな」

「ならば……」

「でも、仮に隠し屋敷を隠れ家として使用していたとしても、今聞いた限りでは地上に直通でいける道はおそらく存在しない。楼座叔母さんは柵の隙間から入ったって話をしていた。チェス盤をひっくり返すなら、柵の隙間が見過ごされていた、ってことになる。つまり、この屋敷からまっすぐ進んで隠し屋敷に到達することを想定していない、ってことだ」

「う、む……？　……ああ、そういうことか。親父殿が若い愛人を軟禁していたと考えた場合、何処かに行ってしまう可能性を考えるなら柵側に注意を払っていないのは奇妙で、その上で柵側に注意が払われていないのであれば逆説的に柵側に注意を割く必要がなかったと言いたいのかね？」

「お、おお……！　なるほど、さすがは戦人さんと蔵臼さんですな。私には分からなかった……！」

「祖父様はベアトリーチェを名乗る女を隠し屋敷に閉じ込めていた。しかし、今の推論に基づくのであれば、柵側から逃げる心配をしていなかった。……なら、楼座叔母さんが確認出来なかった海側に、より逃げやすい場所があったと考えるべきだ。……完全に憶測ではあるんだが、……港……俺達が今日使用した港と、同規模とまではいかずとも、しっか

りとした設備があるんじゃないかと俺は考える」

「確かに……。それなりにしっかりとした設備を整えた屋敷の風体だった、ということだからな……。それを維持するにしても、私達が普段用いる港から資材を運んでいたのでは我々はその存在に勘付くだろう。ならば我々の知らない港……隠し屋敷に直通する隠し湾のようなものがあってもおかしい話ではない」

「だろ？　で、さっきの話に戻るんだが、直通の陸路はおそらく無い。ボートか何かで海を回っていけば早くいけるんだろうが、この天候でそれは無理だ。そうなると、この天候の最中に隠し屋敷とこの屋敷を行ったり来たりするのは現実的ではないんじゃないか、と思う」

「なるほど……。……いや、だが戦人くん、君は知らんだろうが、親父殿は時折行方を眩ますことがあってな……。陸路は整備されていないかもしれないが、隠し通路のようなものは存在する可能性が有るのではないかね？」

……蔵臼伯父さんの指摘は鋭い。

そうだ、俺は陸路は存在しない、という仮説を一旦ぶち上げたが、それは直通の経路が存在しない、ということをそのまま意味する訳ではない。

例えばこの屋敷の何処かに、隠し屋敷まで直通でぶち抜ける地下通路のようなものがある可能性は否定出来ないからだ。そして蔵臼伯父さんが祖父様は突然前触れ無く消えることが有った、と証言している以上、その実在の可能性は高い。

……しかしそうなると問題がある。
蔵臼伯父さんは今そこまで考えずに話したんだろうが、そこへと至る地下通路の存在を知っているということは即ち前提条件として隠し屋敷の存在を知っているということであり……。

「……蔵臼伯父さん。……そもそも、その隠し通路が、隠し屋敷に至るための道だってんなら……、……それを知ってるのは、誰になる？」

「む？　そうだな、隠し屋敷の存在を知っていそうな人物……、……っ！　源次か……！」

……そうだ。……祖父様の腹心の部下であり、そして同時に現状最も盤面において怪しい人物。

現在までの俺の推理や、得られた情報は、第二の晩を除いては『源次さんが犯人であれば構築可能』という仮解答を導き出している。

「げ、源次さんですか……！？　馬鹿な、あの源次さんがそのようなことを……源次さんにとって紗音さんや嘉音さんは我が子のような存在だった……！　それに、その推理では何故源次さんがその二人と親密だった譲治君や朱志香さんを愚弄しなくてはならないのか、その説明が付けられないではないですか……！」

「ああ、南條先生の言うとおりだぜ。確かに、源次さんが犯人なのだ、と断定してしまうと、今俺が考えている動機という面での考えと上手く合致しない。それに、怪しいか

らってだけで犯人だと断定することはしない。あくまでその可能性を検討するだけだ」

「戦人さん……」

「……ただ、それはそれとして源次さんが、……共犯であれば、この事件はかなり手っ取り早くなるとも、俺は思っている」

「う……。……それは、……確かに、否定しきれるものではない……」

「だから、今は……源次さんが無事に戻ってきてくれることを祈るだけだ……」

……。本当にそうなのだろうか。

そう言っておきながら、俺は半ば嘲笑の色すら混じった自問自答を脳裏に行っていた。

俺は、……本当に、源次さんが生存して戻ってくることを願っているのだろうか……？

源次さんはまだ生きているか死んでいるか分からないからこそグレーという立場で落ち着いているが……もしも源次さんが生存してこの部屋を訪れたなら……俺は本当に、その生存を手放しで喜んで迎えられるのだろうか……？

問いの答えは尽きない。

そして、俺が客間に閉じこもっている限り、膠着状態は継続する。

……外に、出たい……。

外に出て、……みんなの、死体を一目見たい。

……ここで考えているだけでは、何も解決できない……。

じりじりと進む時計の針を眺めながら、俺は焦りに身を苛まれるのだった。

《一九八六年一〇月五日一六：二〇》三人のベアトリーチェ》

……時計の針が一六時を指しても雨は依然として降り止まない。

薄暗いままの空は時刻が夕方に近くなりつつあるのも相まってより一層どんよりとした色彩になりつつある。

そしてそんな空模様を窓越しに見つめる客間の中で、俺は楼座叔母さんからとんでもない情報を聞き出していた。

「……それ本当なのか、楼座叔母さん」

「……あの日の記憶が正しいのであれば、だけど……」

「そうか……。いや、ありがとう」

礼を言ってソファにどっかりと座り直す。

天井を仰ぎ、今の情報について考え直したかった。

楼座叔母さん曰く。

「ベアトリーチェを殺……いえ、事故で死なせてしまった日から、私は誰にも何も打ち明けずにいたけれど……一人だけ、その事を伝えた人が居るの。それは……」

「それは……？」

……正直、俺は楼座叔母さんが再びこの話を切り出して来た段階で、おそらくはこの人であろう、という人物に心当たりがあった。

何しろ、この2日間だけでなく、話を聞く限りは昔から怪しい動きが多すぎる。祖父様に忠実な腹心の部下、というのも常人の行動規範とは異なる部分が見え隠れして空恐ろしい。

「源次さんよ。その日の深夜、源次さんに打ち明けたの」

ほら来やがった。

やっぱり源次さんじゃねえか。

……ベアトリーチェが亡くなった後、楼座叔母さんに責が及ぶことがなかったのは源次さんが裏で何かしらの工作をしていたためだろう。

伝え聞く祖父様のベアトリーチェへの入れ込み様を考えると楼座叔母さんが連れ出した結果亡くなってしまったが事故だったから仕方ない、では済ませてくれないように思える。であるにも関わらず祖父様からの追求がなかったということは即ち、ベアトリーチェの死亡は完全な事故であるとして処理されたという事なのだろう。

……しかし、そうなると、俺の脳内で一つ厄介な可能性が持ち上がってきた。

「(死人が発生してもそれを誤魔化せる伝手がある……？　この近辺の……新島の医者を抱き込んで診断書を通せるのなら……)」

ちらり、と。

目線を横にやる。

……そこには、南條先生が腰掛けている。

南條先生が職業倫理をしっかりと持った大人であることについては何の異論もない。しかし、……この六軒島という地理の関係上、この人が共犯ならばあまりにも多くの無茶が通ってしまう。その可能性については俺も朝から幾度となく脳裏を巡らせてきた。

しかし、今回の話はそれとは少し異なってくる。
古くからの祖父様の友人……ということだが、……先ほど俺は、愛人を一人囲い込むと考えた場合、使用人複数名の協力は絶対条件だろう、と考えた。
しかし、同時にもう一つ必要なものがある。
それは医者だ。何か急な事件が発生した際に、対応できる医者。……それも、その秘密の患者の存在を、右代宮本邸側に口外しない、口の堅い人物が。
……南條先生は、ベアトリーチェの存在を知っていたのでは？　という疑念が俺の中で渦を巻いている。

どうするべきか……いや、この問題に関しては蔵臼伯父さんに祖父様の所在を問うのとは重要度が違う。
一度、聞いてみても即座に空気が険悪になることはない……と思う。
そこまで考え、俺は覚悟を決める。
「……南條先生。ちょっと良いか？」
「どうされましたかな？」
「……単刀直入に聞くぜ。南條先生は、さっきから話に出てくるベアトリーチェの存在を、……知ってたんじゃねえのか」
客間に再び投げ込まれる爆弾。
「な……！？」
「っ！？」

驚愕に表情を歪ませる蔵臼伯父さんと楼座叔母さん。

「……」

しかし、当の南條先生は静かな反応だった。

「……根拠としては簡単だ。まず、死んだベアトリーチェを処理する必要がある。内密に埋葬するにしても、医師の診断は挟まれた筈だ。そうすると、この近辺で、……軟禁に近い状態で住まわせていた謎の人物の検死に呼べる医師は、昔からの祖父様の馴染みだという南條先生、あんたしか居ない」

「……」

「しかし、これだけでは確定じゃねえ。もちろん、死亡診断なんてせずに埋めちまう、という手段もあるわけだからな」

「……」

「だが、もう一つ。屋敷に一人で暮らさせる、ということを祖父様がさせるとは思えない以上、ベアトリーチェの事を使用人の中でも数名は知っている可能性があった。使用人のシフトを組む側の源次さんに、……女手として熊沢の婆ちゃんも知っていそうだが……」

「……」

「今言ったこれは前提だ。だがその上で、足りない役がいる。……医者だ。何らかの急病に見舞われた時に診察する医者。……同じだよ南條先生。口を絶対に割らない医者。祖父

様が信用できる人物。……あんたは、それを満たす」

「……金蔵さんが、わしの事を信用していたと？」

「信用してなきゃあの偏屈の祖父様と友人なんて出来ねえと思うぜ」

「……そうですな」

しみじみと、自分自身で噛み締めるような頷きと共に南條先生は俺の言葉を飲み込み、数度逡巡を繰り返して、……そして語り始めた。

「……ええ、そうです。私は、あの隠し屋敷……九羽鳥庵にお住まいだったベアトリーチェさんの主治医をやっておりました。金蔵さんからは堅く、堅く口止めをされておりましたが……その金蔵さんも行方知れずです。……これくらいは口を軽くしても良いでしょう」

やはり、知っている……。南條先生はベアトリーチェの事を、そして隠し屋敷の事も知っている……。

「ベアトリーチェさんですが、……どういう出自の方なのかは、私は存じ上げません。ただある日、……船でこちら側ではない、反対側の港へと連れて行かれましてな。とある人物の診察をして欲しい、とのことで初めてお目通りさせていただいた、という訳です」

「何故、私達に何も言ってくれなんだのです……！　ベアトリーチェが実在する事が分

かっていれば、もっと行動のしようも有った……！」

「蔵臼伯父さん、落ち着いてくれ。……南條先生、どうぞ」

詰め寄る蔵臼伯父さんを押しとどめ、南條先生に話の続きを促す。

「……彼女が幾つだったのかは……かなり若いとだけ聞いておりました。楼座さんにはおいくつに見えましたかな？」

「そう、ね……あの頃の私より年上なのは間違いないけれど、……あら？　そうね、そう考えると、……おかしいわ」

おかしい？　何が……楼座叔母さんより年上程度……ん？

……待てよ、確か『愛人として』のベアトリーチェの認識が広まる以前、『右代宮家の恩人として』のベアトリーチェは戦後に祖父様に黄金を貸し付けた謎の人物って話だった筈だ。

……なのに、愛人としてのベアトリーチェは、楼座叔母さんより年上なのは間違いない、程度の年齢……？

「おいおい、そうなると、何か？　祖父様は金塊を貸し付けてくれた恩人を愛人として囲ってるんじゃなくて……」

「……私は、九羽鳥庵のベアトリーチェさんがどちらの出自の方なのか寡聞にして存じ上げませんが、……おそらく、その娘さんを保護しておられたのではないでしょうか」

「それはまさか、……金塊のベアトリーチェとの、親父殿の……娘ということですか……？」

……蔵臼伯父さんは全身をワナワナと震わせている。

それはそうだろう。もしもその南條先生が言うところの『九羽鳥庵のベアトリーチェ』が祖父様の娘だった場合、それは祖父様直系の、蔵臼伯父さん、絵羽叔母さん、親父、楼座叔母さんに次ぐ遺産の継承権を持つ親族だ。

いや、下手すりゃあ政略結婚だったという祖母様との子供である蔵臼伯父さん達よりも上位の継承権を持つ可能性もある。

蔵臼伯父さんはその事が分かっているから今憤りを覚えているのだろう。

しかし、南條先生はそれを否定する。

「……いえ、金蔵さんは、そうは言ってはおられませんでしたな……確か、昔に、酒の勢いで一度だけ、「彼女の忘れ形見を見つけ出して保護してきた」と仰っておられた記憶があります。……ですから、九羽鳥庵のベアトリーチェさんは、金蔵さんの愛人なのではなく……金蔵さんのかつて愛した女性の、忘れ形見、なのかと」

あくまで、九羽鳥庵のベアトリーチェは、最初に居たベアトリーチェの娘ではあるが、金蔵の娘ではないのだと。

「……それでも、お父様の、義理の娘だったようなものなのね……。ぁぁ……私、そんな人を……」

……金塊を与えた人物を便宜的に初代ベアトリーチェ。愛人だと思われていた人物を二代目ベアトリーチェとしよう。
そうなると、現在犯行を行っている人物は三代目のベアトリーチェ、ということになる。

当初、犯人の可能性が有るのは俺達18人の中に居る変数Xだと考えていたが、この島には19人目のX――二代目ベアトリーチェが一時的にでも存在していた。
そしてこの二代目ベアトリーチェは源次さんや熊沢の婆ちゃんといった古参の使用人とも面識があると考えられるため、これを19人目の犯人Xとして代入することは一見ロジックが通るように思えた。
しかし、楼座叔母さんの話に曰く、二代目ベアトリーチェは既に――20〜18年前に――死亡している訳だから、今回の事件には関係がなくなってしまう。

……しかし、20〜18年前に祖父様の娘のような立場の人物が島内に存在していた、というのは貴重な情報な気がする。

孤島に閉じ込められ、外の世界を知ることも許されないまま若くして死んだ、という境遇。それが、……例えば、彼女の存在を知る誰かにとって、人を殺し得る動機となる可能性は十分にある。

「……南條先生、確認させてくれ。二代目ベアトリーチェの検死は、したのか？」
「……はい。頭部裂傷並びに陥没。脳挫傷も。間違いなく即死でしょう」

「それは、……確実な結果で良いのか？」
「無論です。間違いなく、彼女の死因は落下死によるものでした」

俺は腕を組んで考え込む。
今俺の脳内では複数の軸が回っていた。

蔵臼伯父さんと源次さんによる、祖父様の死亡隠蔽。

犯人Ｘによる連続殺人事件。

二代目ベアトリーチェとその事故死、そしてその存在を知る人物達による隠蔽。

これらは今それぞれが独立して回転している。

何らかの情報を得ることでその間に挟まるパーツが見つかって連動して回り始めるのか、それとも最後まで独立して回転し続けるままなのか。

……俺が導くべき方程式。
犯人Ｘ＋手段Ｙ＋動機Ｚ＝六軒島連続殺人事件という式。

……俺が先ほど考えた『蔵臼伯父さんによる祖父様の死亡隠蔽と実際に発生している事件は別軸の問題である』という推理だが、それを一手進める。

幾度となく送られてきた洋形封筒が当主の指輪によって封蝋がされていることを考えるなら、それは即ち洋形封筒の送り主が当主の指輪を保有しているということになる。しかし、俺の推理通りに、祖父様の死亡隠蔽とこ

の犯人の犯行が別軸で行われているとするのであれば、祖父様が死んだ際のドサクサに紛れて指輪を持ち去らなければ、それは蔵臼伯父さん達の管理下に入ってしまい、現状の犯行構造は成立しない。

即ち、『三代目ベアトリーチェは祖父様が死んだ際のどさくさに紛れて当主の指輪を奪い、それを用いて封蝋を施しているのではないか』

となるのだが……。

こうなっても、現状の最も怪しい人物である源次さんが、何故そんなことをしているのかが分からない。

先ほどの「紗音さんも嘉音さんも源次さんにとっては本当の子供のような存在だった」という発言を考慮するなら、なおさら紗音ちゃんや嘉音くんをあんな風に挑発した挙句殺害する意図が分からないからだ。

……チェス盤をひっくり返せ。

それも、単一方向にではなく、複数方向に。

「源次さんが何故こんなことをしているのかが分からない」ならば、……どうすれば源次さんの行動と犯人Xの行動を矛盾せずに成立させられるか、を考えなくてはならない。

おそらく、この命題の解法は複数存在するが……。……そも、犯人Xと源次さんはイコールではない、としたら？

つまり、三代目ベアトリーチェである犯人Xと源次さんは犯人と共犯関係にある、という仮説。

……真の当主……。

俺は三代目ベアトリーチェなる犯人Xのことを、当主不在となっていた右代宮家の家督を受け継いだ六軒島の主、と先程表現した。しかし、仮に、源次さんが共犯関係だと仮定した場合、祖父様の忠実な右腕であった源次さんが犯人Xに従っている、というのはつまり……。

「(犯人Xは……祖父様が死ぬ前に正式に家督を譲られている……?)」

……なんの根拠もなくこんな説をぶち立てた訳ではない。

この突拍子もない思いつきの根拠は幾つか存在するのだ。

まず、これまでの源次さん犯人説の大部分を転用できること。

第一の晩も、第五の晩も、そして今姿を眩ませていることも、全てそのまま用いて良いということだ。

しかし、最も大きな部分は、第二の晩の謎を暫定的に解決出来ることにある。

第二の晩の最大の問題は、源次さんが俺の眼前に居たことだった。最も怪しく、最も多岐に渡る手段Yを実行可能な、限り無く黒に近いグレーの位置にあるのが源次さんだが、第二の晩においては、[客間は密室だった]ことだけではなく、[源次さんが俺の目の前に居たこと]の二点によって、源次さんを犯人とした仮説は封じられていた。

俺達がドアを破壊して中に突入するまではチェーンが架かっており、中から脱出できない。それを考えれば、第二の晩の事件の真相

は『犯人が中に在室していた』という可能性以外は――荒唐無稽なある一つの可能性を除いては――あり得ない。

だが、源次さんが共犯ならば、これは突破できる。

源次さん以外の誰かが室内に残っていればいい。

親父と霧江さんを殺害し――どうやって？――その後密室を構築して息を潜める。

そして、共犯者である源次さんが隙を見てその犯人を脱出させる。

こうすればあの第二の晩の密室は突破可能なのだ。

「(……それに、これならば、……源次さんが死んでも、問題は無い)」

源次さんが共犯者ならば、この先源次さんが死体で発見されても問題ない。

源次さんが犯人だったなら、源次さんの死体が発見された時点でもう犯行は発生しない。それ以後に犯行が行われたように見えても源次さんの死亡以前に発生した犯行をそれ以後に発生したかのように見せかけているだけ、ということになる。

……そもそも、今の段階で既に第四の晩の犠牲者が存在しないのに第五の晩の「胸を抉りて殺せ」に該当する紗音ちゃんが先に発見されているのだ。

中庭でこの事に気付いた俺は「まだ見つかっていないだけで頭に杭をぶっ刺された犠牲者が居るのかよ……！」と叫んだが、もはやこんな欺瞞には引っかからない。

儀式的な連続殺人に見せかけて死亡順番が前後している、というのはミステリでもおきまりの一手に過ぎないからだ。

……いや、というよりも……、その欺瞞を成立させるには検死が可能な人物が排除されていなくてはならない。死亡してからどれだけの時間が経過しているのかを判別できる人物が残存していれば、時間差トリックはなんの問題もなく解決されてしまう。

だから、南條先生を犠牲者とすることなく同行出来ている今、状況は俺達生存者側に有利なのだ。

……無論、それは、南條先生が犯人Xの共犯者であるという可能性を除外すればの話だが。

……南條先生が、完全なシロか、と言われれば、……俺は、ノーと答える。

仮に祖父様が死亡しているのが確定するのであれば、南條先生はそれを知っている筈だ。祖父様の主治医としてこの島に呼ばれている人物が祖父様の生死を知らない筈がない。

そして同時に、南條先生は祖父様の古くからの友人だ。九羽鳥庵のベアトリーチェの存在すら認知しており、その検死すら行っている。これが怪しくない訳がない。

「(ベアトリーチェ……九羽鳥庵のベアトリーチェ……三代目のベアトリーチェ……祖父様亡き後の六軒島の領主……)」

何故源次さんはベアトリーチェ――犯人Xに従っている？

そうだ、源次さんを共犯者として置くのであれば、今度はこの問題が立ち上がる。何故、源次さんがこんな犯行を幇助しなくてならないのか。
犯人の動機Zが、源次さんの何らかの目的に沿う物だったから？　では何らかの目的とはなんだ？
それが、紗音ちゃんと嘉音くんへの挑発に繋がる物なのか？

何度も言うが、南條先生曰く「源次さんは紗音さんと嘉音さんの事を我が子の様に想っていた」のだという。
であるにも関わらず、紗音ちゃんを殺害し、二人と譲治の兄貴と朱志香との関係を愚弄されることを受け入れている？　それは……奇妙な話じゃないか……？

この矛盾した源次さんの行動を解決するには、共犯として振る舞う動機が二人への情よりも大きい物でなくてはならない。

それを解決するピースは……。……祖父様か？　祖父様への某かの感情が、共犯の動機に上乗せされて結果として共犯の動機＋祖父様への某かの感情V紗音ちゃんと嘉音くんへの情という構図になっている？

……思いつきに過ぎない。
思いつきでたどり着いた答えは真実ではない。それはただの偶然と第六感だ。

……しかし、源次さんが何故犯人に従っているのか、を考えるなら、そのホワイダニットは重要だ。

犯人Xは指輪を保有している。これはほぼ確実だ。

祖父様が死亡している。これは六割程度の確率でそうだと思う。

この二点を満たしながら、源次さんが共犯だと考えるなら、……やはり、犯人Ｘは源次さんに新たな当主だと認められていると考えて良いだろう。

……誰だ……？　新たな当主だということは、祖父様の血を引く誰か、ということなのだろうが……。

「(蔵臼伯父さんも楼座叔母さんも犯人ではない。そして絵羽伯母さんも親父も譲治の兄貴も朱志香も真里亞も全員もう死んでいる。なら、他にはもう居ない)」

……そう考えると、犯人Ｘの条件を満たす人物が残らない。

新たな当主として認められるだけのバックボーンを持ち、そして紗音ちゃん嘉音くん譲治の兄貴朱志香の四人と何らかの接点がある人物……？

そんな人物は俺達の中にはもう残っていない。

その条件を満たした上で生き残っているのは俺だけだが、俺は犯人ではない。

そうなると、犯人Ｘの変数を満たす解は存在しなくなってしまう。

Ｘの中身が存在しないならば、それは人間の事件ではないということ。

つまり犯人は小数点以下の人数を仮託する名義にして魔女、ベアトリーチェその人になってしまう。

そんな馬鹿な話があるわけがない。

だが、事実として、その不可思議領域にしか名指しできる人物が残らない。

犯人X＋手段Y＋動機Z＝この事件という数式は、Xに無理数が入ってしまうため証明不能。
よって、犯人はベアトリーチェ。

くそっ、そんな訳がない。この方向性ではだめだ。
犯人が人間として存在しないベアトリーチェだなんて、魔女に屈服してるのも同然、……。

……犯人は、……ベアトリーチェ？

投げやりな解答。

犯人Xは存在しない人物になるため人間の中には存在しない。よってこの事件は解決不能。
――そんな馬鹿馬鹿しい泣き言を、脳裏でもう一度繰り返した瞬間、これまでばらまかれていたピースがまとまり始める

……ベアトリーチェは、三人いる。
大昔に祖父様に黄金を与えた人物
軟禁されていた、その娘と思しき人物。
この事件を引き起こしている、新たな当主。

……祖父様は、ベアトリーチェを祖母様よりも愛していた。
蔵臼伯父さん達の反応からしても、その人物が存命していれば自分たちよりも継承権において優位に立たれる可能性があると危惧していた。

……源次さんは、三代目のベアトリーチェを当主として認めていると思しい。
祖父様の忠実なる部下であった源次さんが従っている人物なのだから、それ相応の格を持った人間であるということになる。

……九羽鳥庵のベアトリーチェは、楼座叔母さんより年上に見えて、そして先程のエピソードは、およそ18〜20年前のこと。

当時の楼座叔母さんが中学生くらいだと考えるなら、それより年上な九羽鳥庵のベアトリーチェはおよそ15〜25程度？
気怠げな雰囲気。物悲しそうな気配。……気怠げで、心ここにあらず、と言った印象だった。それを楼座叔母さんは何度も繰り返していた。よほど印象的な姿だったのだろう。

まさか。……まさか……。

結びついてゆく情報達。ばらばらだったそれらが一つの絵画となって成立し始める。

俺は知らず知らずの内に手を握りしめていた。
これらの要素を全て兼ね備えられる可能性が、一つだけ存在する。

これらの変数を全てぶち込んでも、無理数にならない解は、確かに存在する。

そうだ、それは……。

「(子供……!……二代目ベアトリーチェの、子供か……!)」

九羽鳥庵のベアトリーチェは、異常なまでに気怠げな様子を示していたという。
これは俺の邪推に過ぎないが……当時彼女は、産後間もない状態だったのではないか？九羽鳥庵という、小さいながらも完璧に管理された箱庭の中で暮らしていた彼女は、父親が誰かは知れないものの――だがその候補は限られている――、赤子を出産した。しかしそれを彼女に育てさせる訳にはいかなかったのではないだろうか。
九羽鳥庵のベアトリーチェは楼座さんの話から伺うだけでも、一般常識的な物をしっかりと理解しているとは思えない状態だった。そんな彼女に母親をやらせることは出来ず、祖父様はその赤子を何処かへ預けた。

しかしそれによって彼女は自分の置かれている境遇に疑問を持ってしまったのではないだろうか。
だからこそ、楼座叔母さんの言葉に従って外へと出てしまった。

祖父様が娘のように、籠の鳥の如くに閉じ込めるほど偏愛していた二代目ベアトリーチェが、事故死する前に出産した、俺達が知らない未知の血族。
それが、今の右代宮家の当主にして、三代目のベアトリーチェ……!

俺はずっとベアトリーチェというのは小数点以下の人数によって表されるペルソナだと思っていた。

だが違う！　ベアトリーチェは、居る！

俺達18人の中にベアトリーチェというペルソナを被った犯人Xが潜んでいるのではない。

……その逆なのだ。俺達の中に、犯人Xというペルソナを被ったベアトリーチェが潜んでいる……！！

ならば、そのベアトリーチェの子供という可能性を満たす人物は――。

――ジリリリリリンッ、ジリリリリリンッ。

「「「……？！」」」

突然、客間に、……静寂と、俺の思考を引き裂く異音が轟き渡る。

……ベルの音。……電話の音。

それは、……内線のベル。

……今朝から、断線している筈のベルの音……！

複数人がガタリ、と椅子から立ち上がる。

「馬鹿な……！　電話は断線している筈……！」

「ふ、復旧した、ということでしょうか……？」

「……いや、……俺達はそもそも、断線を確認してねえ。……出て良いか、蔵臼伯父さん」

確かに、動揺はした。
朝の時点では、島の外への無線も、内線も機能不全に陥っている、という話だった。なのに、今急にそれが通じたのならば、……それはまるで魔法によって妨げられていたものが一時の気まぐれで許されている……そのような錯覚すら覚えてしまうだろうが……。

そも、不通を訴えたのは誰だったか、という話であり……やはり、源次さんだ……。

「……うむ、頼む」

頷いた蔵臼伯父さんに俺も頷きを返し、未だに鳴り続ける電話に手を伸ばす。
……今この場で電話が鳴る可能性は二つ。
一つは行方が分からなくなっている生存者による助けを求める電話。

そしてもう一つは、犯人サイドからの何らかの意思表示。
さあ、どちらだ……？

「……もしもし？」

「――――――――――――――――――――――――」

……声は、……なかった。それどころか、音すらもない。
受話器の向こう側は、まるで闇が渦巻くような、……静寂……。

「……誰だ……？　源次さんなのか？」

「――――――――――――――――――――――――」

「熊沢の婆ちゃんか、それとも郷田さんか？」

……返答は、ない。

……本当に、繋がっているのだろうか……？　……いや、それは間違いない。向こう側の音はまるで拾っていないが、……接続が切れているという訳ではないのだ。

「……お前は、……誰だ……？」

ならば。

源次さんでも、熊沢の婆ちゃんでも、郷田さんでも。その何れでもないのなら。

「……お前は、……ベアトリーチェなのか？」

「……くっくっく」

「――！」

長い、長い沈黙の末。その問いかけですら答えは返らぬと思えたほどのあまりにも永く感じた一瞬の後に、受話器の向こう側の何者かは、ただそのひそやかな笑い声のみを返して。

「――妾の手番は既に済んだぞ。次はそなただ」

「ッ――てめえ……！」

「くっくっく……。なあ戦人ァ……お前、好きだろぉ……密室ゥ……」

「おい、待てっ!!　てめえは誰だッ!!　答えやがれッ!!」

「当ててみろよォ、デボン州の沖合にご招待するぜぇ？　あっひゃっひゃっひゃああぁッ!!」

――ガチャッ！　ツー、ツー、ツー……。

「切りやがった……!!　畜生ッ!!」

憤りに任せて受話器を台座に叩き付ける。

……女の声だ、女の声だった……！

若い、俺とそう年齢が変わらなさそうな女の、声。

くそッ、居る！　ベアトリーチェは、居る!!

この島に、居やがるんだ……!!

「ば、戦人君……？　もしかして、今のは……」

舌打ちをする俺に怯えた声で問いかける楼座叔母さん。その怯えは、俺へのものではない。それは、俺が口にした名前に対する怯えなのだ。

「……どうだろうな……だが、明言はなかったが……そういうことだと思う」

「っ、……」

そしてその怯えは結実した。
顔面を蒼白にしてソファへとへたり込む姿は哀れだが、もう俺の側にもそれを気に掛ける余裕はない。
「蔵臼伯父さん、電話の相手は、「妄の手番は既に済んだ」と宣いやがった。……多分、残りの行方不明者は、……もう」
「くっ……！」
手番。
この状況下で、その言葉が意味するものは明白だ。
こいつは、明らかに俺達生存者を意識している。俺達が、自分の起こした事件に対してどのように対処するかを、測っている。
ならば、手番とは、……。
「……新しい事件を起こしたから、挑んでみろって言いてえのかよ……！！」
なめやがって……。
だったら、そっちの誘いに乗ってやろうじゃねえか。
「……蔵臼伯父さん、俺は外に出る」
「……」
「もう閉じこもっていても埒は空かないと思うんだ。……それに、俺達は使用人のみんなの鍵さえ回収できてない。犯人はマスターキーを持ってると考えたなら、この客間も安全じゃない。……なにより、俺は事件を解決したい」
「……」

蔵臼伯父さんはただ静かに地面を見ている。
……消極的反対、といったところだろうか。
「……悪いが、俺は行くぜ」
まあ仕方ない。こうなる覚悟はあった。いずれここを出て、再検証に向かわねばならない、という思いはあったからだ。
そうなれば、蔵臼伯父さんはそれを止めないだろうし、この部屋を出ることはないだろう、という確信も。
……だから。
「――待ちたまえ、戦人君。……私達も、共に行こう」
「なっ……」
その言葉は、想像していないものだった。
「楼座、南條先生。確かに戦人君の言う通りだ。我々は生存者が逃げてくる可能性を考慮してこの客間に残っていた訳だが……完全な籠城が不可能なことを思うならば、移動しよう」
「移動、って……どこに……？」
「……親父殿の書斎だよ」
「お父様の書斎、って言ったって……鍵は源次さんが……！」
「だから、……源次を探しに行くのだ」

「……書斎の鍵は、マスターキーとは別ってことっすか？」

「ああ。しかも、一本だけしかない」

確かに、それならば鍵さえあれば安全は確保される。犯人がいくらマスターキーをかすめ取っていても、その一本だけの鍵さえこちらがしっかりと持っていれば、中に立ち入られることもない。

この客間は、蔵臼伯父さんが語った通り、マスターキーで解錠することが出来る。しかし、俺達はそれに対して内鍵を掛けることは出来ても、それ以上の防御策を持ち合わせない。四人全員の頭が冷えた今だからこそ言えるが、客間は籠城には不向きな空間なのだ。ならば、俺と蔵臼伯父さんの目論見は一致している。

「親父の書斎は親父が自分で設計して作らせたものだ。中には寝台やトイレ、浴室すら備え付けられている。いわば、この家の中に、親父の書斎という名の小規模な家がもう一つある形だ」

「確かに、金蔵さんの書斎は扉も頑健な作りです。一度中に入ってしまえば、侵入される危惧は無い」

「おお……流石祖父様だぜ……金持ちってすげえや……」

……そんな呑気な事を言いながらも、俺は一つの確信を深めていた。

この屋敷の中に、もう一つの小さな家があるような環境。

風呂も、トイレも、ベッドもある。それならば、その外に出る必要がない。蔵臼伯父さんは、第一の晩の事件発覚後、親父達と共に書斎に上がり、そしてそこで祖父様の姿が消えていた、と言ったが……。

「(やっぱり、……と言うのもなんだが、……。祖父様は、居ない……)」

その中に全てが揃っている、ということは即ち、そこから出る必要がない、という事だ。なのに祖父様は不在になっていた、と主張するのであれば、思考が『そもそも最初から居ないのでは？』となることは避けられない。……いや、幾ら何でもおかしいだろ。蔵臼伯父さんと夏妃伯母さんは隠していた側だとしても、……朱志香は怪しいと思わなかったのかよ。

……朱志香ならあり得るか……？

などと、失礼な考えが脳裏を過ぎる。しかし、それはもちろん朱志香の目が節穴、という訳ではなく……、あいつは自分の両親が祖父の死亡を隠蔽している事に気が付いたなら、……その不正を暴くことよりも、……隠蔽に荷担する可能性が０ではない気がするのだ。

そうなってしまえばこの家で祖父様が死んでいることは公然の秘密扱いになってしまう。

「(……いや、想定だけはしておくべきか……？　祖父様がもしも……本当に生きていたら、俺はどんな推理が可能になる？)」

……可能性だけは考慮しておかないといけない。

かの世界一高名な名探偵も述べている。
「全ての不可能を消去して最後に残った物は、それが如何に奇妙な事であっても真実となる」と。
俺が祖父様の不在を確実に断言出来るまで、可能性を完全に消去してしまってはいけないのだ。

――そんな俺の考えに対して、脳内で誰かが囁く。「……それが、魔女の仕業かもしれない、という可能性でも？」

……。

……。

……それは、……。

……答えは、未だに出ない。
全ての犠牲者をこの目で確認し、全てのトリックを検証し終わった時に、魔法による殺人の可能性しか残らないとしたら……俺は、それを受け入れられるのだろうか。

◇　◇　◇　◇

「……戦人君、申し訳ないが、外を一瞬見てもらってもかまわないかね」

「よし来た……。三人とも、準備は良いか……？」

ベアトリーチェと思しき人物からの内線。
……それから何分が経過したのだろうか。
俺達は客間を後にする準備を整えて、廊下の気配を窺っていた。

蔵臼伯父さんと楼座叔母さんを後ろに控え、俺は客間のドアにぴったりと張り付いていた。

……これは、場所と登場人物だけを変えた、先程のボイラー室に突入する際の再話なのではないか。そんな気付きが胸中に奔るが、それを飲み下し、俺はドアノブに手を掛ける。

キィ、と軽い音。油がしっかりと注されているのだろう。その僅かな軋みだけを伴って、扉は動く。

「(人の気配は……、……無い、か?)」

大丈夫だ、と後ろの二人にハンドサインを行い、そっと扉を押し開いてゆく。

……恐らく、犯人が俺達を出待ちしている、ということはない。……なんとなくではあるが、俺は犯人が何をさせたいのか、理解し始めていた。

犯人は、謎を解かせたいのではないだろうか。

……無論、俺達全員を殺すつもりであることは前提だと思う。

しかし、その途中の段階において、……なんというか、俺達に、自分――つまりはベアトリーチェ――へ挑ませる、というプロセスを挟んでいるような気がするのだ。

……うん、そうだな。そもそも、……ミステリを否定しかねない大前提だが、……人を殺すだけなら、密室など作らなくていいのだ。

面と向かって刃物なり、銃器なりの凶器を振りかざせばそれで話は終わる。

複数人を殺したいのであっても、一方的に殺害できる凶器や、或いは薬物などを用いれば簡単だ。密室など構築して、誰が犯人なのか分からないようにする、というのは迂遠な手法に過ぎない。

だが、それでも、この犯人は、それを選んだ。

人は、人を一人殺すだけでも、多大なエネルギーを必要とする。

だというのにこの犯人は、朝に六人を殺しただけでは飽き足らず、碑文に則って、より多くの犯行を重ねている。

……ならば、転じて。

チェス盤をひっくり返すならば、……この犯人は、まるで……。

謎に挑ませること自体が動機の一つのようではないか。

コン……。

「ッ！？」

――扉を、ゆっくり、静かに押し開けていた俺の耳に、一つの音が届く。

扉が、何かに衝突した音。

扉が接触したのだ、と気付いた時には、既に俺はその「何か」を目視してしまっていた。

「こいつ、は……！」

「戦人君？　何か……、……ッ！」

後ろに立っていた蔵臼伯父さんも、すぐさま「それ」に気付く。

楼座叔母さんも、南條先生も俺達の様子に気付いたのだろう。後ろから覗き込んで来た二人も、それを認識する。無言のまま息を呑む二人だが、俺はもう扉の外の危険など無視して「それ」へと手を伸ばす。

「五通目の、洋形封筒……！！」

◆　◆　◆　◆　◆

右代宮家の皆さん。謎解きは楽しんでおられるでしょうか？

碑文の謎を解かない限り、皆さんの勝利はありません。碑文の謎が解けないのならば、誰も生き残れないのです。

皆さんが無い知恵を絞ろうと、碑文の謎すら解けぬ者には何をしようとも無駄なのです。

私を探そうとも無駄。私から逃れようとも無駄。

そして私を否定しようとも、全て無駄です。

けれど、もしそれでも皆さんが、私の姿を探し求めると仰るのであれば、私はそれを拒みません。

どうかその無為な試みを、心ゆくまで堪能されると良いでしょう。

第四の晩の生け贄は、3階、控え室に。

それ以降は皆さんの目でお確かめください。

――――――黄金のベアトリーチェ

追伸
こちらの鍵はお返しさせていただきます。魔術的な結界が施された金蔵様のお部屋以外は、私にとって不要な物ですので。

◆　◆　◆　◆　◆

「……野郎……！」

探しても無駄、逃れようとしても無駄、そして否定しようとも無駄。
それは、第一の晩の際に発見した手紙にも記してあった、自分の正体を突き止めようとしても無駄だ、というニュアンスをより強く、明確にした物だった。

……だが、今回の手紙にはもっと碌でもない付属品が付いている。それは、鍵。

「マスターキーを、使用人全員の分、返却してきやがった……！」

全部で、五束。
この屋敷のマスターキーは鍵束の形で存在している。
そも、マスターキーという物は、特定のグループ内の鍵全てを解錠施錠する事が可能な鍵を指す名称であるが、それはあくまで、特定のグループ内に限る。それが、規模の小さい施設の物であればともかく、この屋敷のような大量の施錠箇所が存在する場所では、マスターキー、という名称から受ける印象に反し、マスターキーは複数本存在する。
よって、俺がマスターキーと呼んでいる物は、あくまで「そのマスターキー群が束に閉

じられた鍵束」という物品であって、単一の鍵そのものを指す物ではない。

しかし、その洋形封筒にはその鍵束が、五束全て、一緒に納められていたのだ。

つまりは、全てのマスターキーが俺達の手に渡ったという訳だ。これまで俺達は嘉音君や紗音ちゃんからマスターキーを回収することを徹底せず、状況に応じて走り回るだけの時間を過ごしていた。

だが、五本全ての鍵が俺達の手元に来た以上、犯人は俺達がどの部屋に籠もっていても侵入は不可能に思える。

「……兄さん、これなら客間から出なくても……」

「……いや、そもそも、各部屋の鍵は一本ずつ存在しているし、……合鍵を作成している可能性もある。……書斎の鍵に関しても同様ではあるが……、あちらの方が、確実なのは確かだ」

蔵臼伯父さんと楼座叔母さんの会話が耳に届く。

……俺達は今、3階の控え室へと向かっていた。

この屋敷の3階というのは、その殆どが祖父様の書斎で埋め尽くされているが、控え室はその書斎以外の数少ないスペースだ。

使用人用のベッドと、デスク。それだけが置いてある部屋だというが……。

「……また、……魔方陣か……」

その扉には、……べったりと。不気味な……赤黒い液体で……まるで今し方描いたばかりだと言わんばかりの、瑞々しさすら感じさ

せる、滴り落ちる塗料によって奇怪な紋様が。文字と、線と、円で構成された、不気味な図形が描かれている……！！

「(第四の晩……確か、頭を抉りて殺せ……。……この扉の向こうには、……頭をぶち抜かれた死体が……？)」

脳裏に、紗音ちゃんと嘉音君の最後の姿がフラッシュバックする。

真っ赤な血をだくだくと溢れさせる姿と、その色彩が、この扉に塗りたくられた塗料とダブる……。

「……蔵臼伯父さん、開けてくれ」

――ガチャリ、と音がして鍵が回される。

……施錠されていた、という事は……この部屋は密室だった、という事になるのだろうか？　……いや、それは早計だ。

今し方蔵臼伯父さんが語るまで俺も忘れていたが、そもそもこの屋敷は各部屋の鍵が一本、そしてマスターキーも使用人の人数分存在している。

つまり、マスターキー五束の他に、最低でも一本はその部屋を開けられる鍵が存在している訳だ。

よって、俺達の手元にマスターキーが揃っていても、この部屋の本来の鍵である一本の所在が不透明である限り、それが真の密室であるかは確定しない。

だから、俺が今考えるべきは、……この部屋の中で誰が……死んでいるのか。

俺の、そんな思考と同期するかのようにして、ゆっくりと、しかし確実にドアを押し開ける蔵臼伯父さん。

……恐らく、この中に犯人が潜んでいる、……それは無い。

……犯人が、自殺している、……それはもっと無い。

きっと、この中には、死体だけがある。

開け放たれる、ドア。

部屋の中にあるのは……、先んじて聞いていた通りに、デスクと、……ベッドと、クローゼット。

……そして。

……ああ、その死体は……、……ベッドの上で、倒れている、その人物は……！！

俺が、幾度となく疑った、……その人で……。

……その人が、今……、ベッドの上で、……額に穴を開けられて、……その隣に、血濡れた杭を転がして……。

「ちっくしょう……」

あんたが、あんたがここで死んでるのかよ……！

そりゃあ、俺はあんたを疑ったさ。状況証拠的に、あんたが最も怪しい駒だと思っていた。それどころか、あんたであれば現状の事件は殆ど解決可能なんじゃないか、とまで思っていた。

……なのに、だというのに……！

「ここで、あんたが死んでるのかよ、……源次さん!!」

◇　◇　◇　◇

一九八六年一〇月五日一七時。戦人、蔵臼、楼座、南條の四名はマスターキーを用いて3階控え室を開放。

この際、戦人の眼前で蔵臼が鍵を開けるまで、確かに扉の施錠は行われていた。

一行は控え室内において源次を発見。

頭部には杭が抜け落ちた痕。そして、血濡れた杭が近くに落ちていたことから、戦人は第四の晩の生け贄として殺害されたものと判断。

室内のデスクの上には、洋形封筒に入った2F客室の鍵が置いてあった。

一行は、2F客室へと移動し、洋形封筒の中から発見した鍵で解錠。

一行は2F客室内において紗音を発見。

胸部には杭が再び突き刺されており、紗音の遺体をボイラー室からここまで運んだ上で生け贄としての見立てのために再度杭を突き刺したものと推定。

室内のデスクの上には、洋形封筒に入った朱志香の部屋の鍵が。

一行は朱志香の部屋へと移動し、洋形封筒の中から発見した鍵で解錠。

一行は朱志香の部屋内において嘉音を発見。

腹部に杭が突き刺されており、遺体をここまで移動させた上で第六の晩の生け贄として遺体を損壊させたものと推定。

室内の机の上には、洋形封筒に入った厨房の鍵が。

一行は厨房へと移動し、洋形封筒の中から発見した鍵で解錠。

一行は厨房内において郷田を発見。

膝部に杭が突き刺されており、胸部への損傷によって死亡した後に第七の晩の生け贄として遺体を損壊させたものと推定。

室内のテーブルの上には、洋形封筒に入った2F貴賓室の鍵が。

一行は2F貴賓室へと移動し、洋形封筒の中から発見した鍵で解錠。

一行は貴賓室内において熊沢を発見。

脚部に杭が突き刺されており、胸部への損傷によって死亡した後に第八の晩の生け贄として遺体を損壊させたものと推定。

室内のテーブルの上には、洋形封筒に入った控え室の鍵、並びに源次が所有していたと思われる。

【一行が2F客室を出て朱志香の部屋に到達するまでの所要時間は、一分以内である】